

2022年度 第24回 愛恵エッセイ受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

— 断絶を乗り越えて —



公益財団法人

愛恵福祉支援財団

2022年度 第24回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

－ 断絶を乗り越えて －

公益財団法人

愛恵福祉支援財団

今日も公園で小休憩
木枯らしが吹き 体が寒い
枝の隙間の 空が美しい
私は沢山の情報を同時に処理していた
さらにそれを発展させて考察までしていた

ただの一瞬で、たくさん感じて、考える
これってすごいな
私という存在は、尊いな

同じように感じて、考える存在が
あそこにも、あそこにも
みんなすごいな、尊いな

こんなに懸命で、尊くて、愛しいものたち
消えたらやだな
簡単に、あっという間に、たくさん消える
そんなの
やだな

表紙・詩 土田 千恵

“豊かな福祉社会を創るために”

～ 断絶を乗り越えて ～

ごあいさつ……………愛恵福祉支援財団 理事長 (4)

■ 学生の部

〔最優秀賞〕

・利用者主体か介護者主体か……………佐藤ひより (6)

〔優秀賞〕

・ステレオタイプ……………小葉 空 (9)

・差別がない世界を作ろう！……………尹 錫俊 (12)

・希望を生む社会～家族の断絶を乗り越えて～……………田淵 聖依 (15)

〔佳作〕

・壁のない世界へ……………水本 園乃 (18)

・自然に学ぶ命の繋がり……………戸澤 愛美 (21)

・見えない障害を乗り越えて……………藤原 美聖 (24)

〔奨励賞〕

・ふくしのこころ……………藤本 千尋 (27)

■ 専門職の部

〔最優秀賞〕

・手話の世界へようこそ！……………西田 里奈 (32)

〔優秀賞〕

・私の価値観が生きる、高齢者アパート……………石塚 清浩 (35)

〔佳作〕

・福祉の一步め……………長町 明子 (38)

・社会における居場所づくり……………秋谷 進 (41)

■ 一般の部

〔最優秀賞〕

・共に紡ぐメロディー……………後藤 里奈 (46)

〔優秀賞〕

・マーさんの安全標語……………大西 賢 (49)

・音楽が大好きだから～生きていくために……………西濱優衣香 (52)

・地縁……………田中 一慶 (55)

〔佳作〕

・園芸療法を通した豊かな福祉社会の実現……………宮永 幸則 (58)

・想いを声に、カタチに……………小松崎有美 (62)

・うそから出た誠……………東 のぶこ (65)

■ 外国籍の部

〔最優秀賞〕

・コロナ禍での心理的な成長……………申 林 (70)

〔優秀賞〕

・イスラム教の国々の女性問題……………ナイム マワラ (73)

〔佳作〕

・認知症断絶を乗り越えて……………ZHANG MINGQIN (76)

・豊かな福祉社会を創るために 断絶を乗り越えて……………イソ チ ウィン レ (80)

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…………… (83)

ごあいさつ

公益財団法人 愛恵福祉支援財団

理事長 遠藤久江

わが国の最重要とされている政治課題は、「少子化対策」それも「異次元の……」という対策を行政がいたしました。日本の人口が毎年減少して、それも40年以上も続いており2050年ころには現在の人口を下回ることで2,000万人、合計で1億人程度になるとのことです。人口が減るのは、国の力が小さくなる、弱くなることにほかなりません。

なかでも生産年齢者が増えないことは、労働力不足から経済規模の縮小、国際競争力の低下、また、医療介護の増大、社会保障制度の給付と負担のバランスの不均衡、生活の基礎的な部分での担い手の不足などで、国際的にも魅力に欠ける国になってしまいます。

2023年度の国家予算も社会福祉にかかわる予算は全体の30%強を占めるでしょう。

すべての人が安心と安全、たがいに信頼できる社会が持続できるためのコストです。

少子化、人口減少が進む中でもコスト削減をするようなことにならないよう、そして国民の幸福のために「少子化対策」を含め国力の維持向上を期待することです。

2022年度も「愛恵エッセイ賞」に応募いただきありがとうございました。長く続くコロナ禍にあって、3年間もマスクによって素顔を見ずに卒業していく学生の皆さん、対面で看護、介助に当たれなかった人たち、海外から就労・就学のため来日した人たちなどに絶たれた期待や感情。それによる不利益を受けざるを得なかったこと、それらの困難を綴り、そこからの回復を訴えていただける場としてくださったことと思います。

初めての試みとして国籍を海外に持つ人たちからの公募も致しました。当事者でなければ見えない、感じ得ないことを記していただきました。貴重な記録としたいと存じます。

2023年3月

学 生 の 部

■最優秀賞

利用者主体か介護者主体か …………… 佐藤 ひより

■優秀賞

ステレオタイプ…………… 小葉 空

差別がない世界を作ろう！…………… 尹 錫俊

希望を生む社会～家族の断絶を乗り越えて～…………… 田淵 聖依

■佳作

壁のない世界へ…………… 水本 園乃

自然に学ぶ命の繋がり…………… 戸澤 愛美

見えない障がいを乗り越えて…………… 藤原 美聖

■奨励賞

ふくしのころ…………… 藤本 千尋

■ 最優秀賞

利用者主体か介護者主体か

佐藤ひより

私には亡くなった曾祖父との思い出があります。母の田舎に帰省した時、母の実家には自宅で介護を受けている曾祖父がいました。

私の記憶にある最初の頃の曾祖父は元気で居間で皆で一緒にご飯を食べたりしていました。そんな曾祖父に対して、当時の私は少し怖い印象を持っていたと思います。私は曾祖父からどこか厳格な雰囲気を感じていたのかも知れません。そんな曾祖父は、毎年夏に帰省するたびにだんだん弱っていき、最後の頃は自宅で寝たきりになりました。曾祖父は、家で過ごすのが良かったのか施設に入ることを嫌がり、祖父と祖母が在宅で介護をすることにしました。当時小学生だった私は帰省している間、食事を運ぶ手伝いをしたり、清拭をする様子を見たりしていました。食事を運んだ先での曾祖父は、私を見ても祖母が私を紹介しても誰なのか認知出来ないという状況でした。それが初めて私が認知症を目の当たりにした出来事であり、私が初めて経験した介護の世界でした。とはいえおむつ交換や褥瘡の処置など踏み入ったところまで見た訳ではないので、今思えば介護経験のない祖父母にとって、一人の人間を介護するということの労力たるや相当なものだったと介護の勉強をしていると思います。しかし祖父母は不満を言うこともせず曾祖父の介護をしていました。学校で勉強している段階ですら時々辛いと思ってしまう私にはきっとそんなことは出来ないと思います。体位変換も時間ごとに行っていて、それは私もなんとなく記憶に残っています。曾祖父は

もう亡くなってしまいましたが、その頃から私は介護をするということ、人の世話をすることに興味があり、介護の仕事を目指すきっかけとなった出来事だったと思います。

そして私が小学校高学年や中学生になった頃、曾祖父をどうして施設に入れてプロに任せなかったのか、どうして少ない知識で自宅で介護をするを選んだのかなど、疑問がたくさん生まれてきました。私自身当時の介護の背景を知らなかったからでもあると思います。その頃の私は利用者主体という考え方から断絶した考え方をしていたと今思い返しますと感じます。高校に入学し、介護福祉科として少し深い内容まで学んだ今となれば、祖父母に共感できるところがたくさん出てきました。祖父母はきっと利用者主体の視点に立って施設に入れない決断をしました。小中学生の私とはちがひ、今の私は、祖父母の尊厳を守るには最善の策だったんだと考えられるようになりました。

また、実際に私も将来祖父母や両親が介護を必要とする状態になったら、私が介護できるようになりたいと思って介護福祉士をめざし始めました。しかし、それは本当に利用者主体の視点で考えているといえるのでしょうか。介護者の都合を押しつけてはいないでしょうか。

実際に施設実習に行ってみたら、施設よりも家で生活したいという利用者さんももちろん一定数居ましたが、利用者さんの中には家に居る時間ではなく、お世話をしてもらえたり、同世代の人と話していただける施設に居る時間が一番幸せだという方も居ました。私はどんな人でも、なじみがあり今まで生活してきた家に居る時間が一番だと思っていたので、とても驚いたと同時に勉強にもなったと思います。

介護をするという面では、利用者主体の視点に立つことを意識しているつもりではいたいけれど、家に居る時間が一番だろうという気持ちを押しつけていた私は、知らず知らずのうちに介護者主体の視点に立ってしまっていたということに気がつきました。

また、実際に私の両親も私の手で介護されることよりも、施設に入ることを望んでいます。ですが、私が祖父や両親を介護したいという気持ちは変わっていませんでした。その点に関しては、これから更に介護について学んでから考えていこうと思います。

このように、介護される側の希望と介護する側の希望のぶつかり合いも介護の難しい点であり、利用者主体の難しさを物語っているなと思います。

将来私が介護職に就いたら、その人のニーズをしっかりと理解し、実現するという視点の利用者主体の介護を追求していきたいと思います。

■ 優秀賞

ステレオタイプ

小薬 空

「人身事故の影響により、各駅・快速共に当駅で運転を見合わせております。お急ぎの方には、ご不便をおかけします。なお、復旧の目処は立っておりません。」

人がごった返した駅のプラットホームを、なんとか両手で漕いで改札を出た私は、曇天の下、代替の移動手段も見つけられず、にっちもさっちも行かなくなっていた。人流は方向こそ滅茶苦茶で、しかし通りすぎる人々の顔からは共通して不安と疲労が見てとれた。「腹括るか」

私の家はこの駅から10kmほど離れた距離にあり、歩いて帰るギリギリの距離である。不本意であるが仕方がない。せめて傘だけは買おうとコンビニへ向かったのだが、その途中で私は道端に寝そべるおじいさんを見つけた。

歳は低く見積もっても70歳くらい。服は汚れていて、近くには角ハイの空き缶が無造作に捨ててあった。おじいさんは「ホームレスです」と言われれば納得してしまいそうな風貌であり、普段の私なら無視して通り過ぎてしまっただろう。しかし、どうも様子がおかしい。よく見ると、おじいさんは右手の甲から出血していたのだ。おそらく15分くらい前に怪我をしたのだろう。血は半分固まってきて、赤黒い瘡蓋のなりかけが私の目に止まったのである。医療については門外漢だが、傷を放置していると細菌が入って良くないことくらいは知っていたので、私は「気がついてしまった責任」でそ

のおじいさんにティッシュを渡した。するとおじいさんは、何かを小声でつぶやいた。

「起き上がらせて」

私は何度か聞き返したが、確かにおじいさんはそう言った。

「起き上がらせて」

私はおじいさんに手を貸して、体を起こしてやろうとした。しかし、おかしい。おじいさんはびくともしないのである。私はその原因がリュックサックにあると踏んで、おじいさんの肩からそれを外して持ち上げた。重い。それは、明かに 20kg を超えていた。

そして私は気がついてしまったのである。

「このおじいさんは、ホームレスじゃない。きっと数分前に転んでしまって自力で起き上がれなくなっていたのだ。」

そう仮定すると全て合点がいった。私はおじいさんの荷物を代わりに持ち運び、タクシーを捕まえて家まで送ってやった。おじいさんからは、後日感謝の旨を伝える手紙が届いた。

これは私の体験談である。おじいさんに手を差し伸べ救った美談に一見思えるかもしれない。しかし「あっぱれな私！おじいさんを救ったのだ！」という気分には到底ならない。私は今でも、あの日私があその道を通らなかつたらと考えてしまう。おじいさんはあそこに一時間近く倒れたまま座り込んでいたことが、後日手紙で判明したからだ。

人通りの少くない道で、一体私が気づくまでに何人の人が見て見ぬふりをしたのだろう。私が気づかなければ、おじいさんはあと何時間あそこで血を流していたのだろう。今思えば、おじいさんは運が悪かった。皆「どう帰ろうか」という自分の問題に必死になっていて、周囲を見渡す余裕がなかったし、おじいさんが飲んだわけ

ではないポイ捨てされた空き缶が近くに転がっていたのも、不幸だった。おじいさんは、手を貸した私でさえ「ホームレス」と誤認してしまうような状況だったのである。

昨今、「日本の世代対立」という問題をよく耳にする。「若者は根性がない」だとか「毒親」だとか「老害」だとか、そういった自分の所属する世代以外を一まとめにして非難することが流行している。私は誰が分断を扇動しているか、という点は問題ではないと考える。分断の原因は紛れもなく当事者である「私」と「あなた」の中にあるからだ。私はこの一件を通じて、自身の中にべっとりとこびりついた「ステレオタイプ」の存在に自覚的になった。「身なりの汚いおじいさんはホームレス」「ホームレスなら無視してもいい」この二つの考えに私はなんの疑問も持たずに、おじいさんを見捨てかけたのである。そして私のように多くの人が彼を無視した。ステレオタイプは、決していいものではない。しかし、誰もが持っている当たり前のものだとも、同時に思う。行き過ぎた分断の先に待ち受けるのは「断絶」だ。私たちはなんとしてもこれを阻止しなくてはならない。そのために、私たちは「他者に何かを求める」のではなく、まず自身のことをよく分析する必要があると思う。そして、他者を自分の言葉で再理解することが、分断に終止符を打つと思う。ステレオタイプに自覚的になろう。

■ 優秀賞

差別がない世界を作ろう！

尹 錫俊

幼い頃から分かち合いの意識を目覚めさせ、一緒に生きていく社会に対する価値観を植え付けなければならないというのは、多くの人が共感するテーマだ。しかし、いざ「福祉教育とは何か」と尋ねると、気軽に答える人がいない。

これに対して1968年から「福祉教育実践」を明文化した日本の全国社会福祉協議会福祉教育研究委員会は「人権を前提に成立した平和と民主主義社会を作るために歴史的・社会的に疎外されてきた社会福祉問題を素材に学習すること」と定義する。社会的問題を集中的に露呈している高齢者や障がい者など社会福祉サービス利用者との交流および支援活動を通じて豊かな福祉社会づくりを推進する意図的・計画的な教育実践方法だということだ。

実際、福祉教育を受けた生徒たちの活躍は、地域社会全体の変化をもたらすこともある。日本の長野県大町市ボラボラ倶楽部。小・中学生を対象に週末ごとに開かれる「ボランティア学院」修了生が組織した集まりだ。学校で学んだ福祉知識を土台に学校と学年を越えて活発なボランティア活動を行っているこの集いの青少年たちは老人ホーム訪問、障がい友人たちとの交流、街に便宜設備を設置する「福祉地図作り」事業を展開中だ。

また、彼らの活動を通じて駅、歩道、点字ブロックなど距離の改修工事が始まった。この活動に参加したある子供は「障がい者や高齢者に単純な親切を施すのではなく、不便なところを知らせ、気楽

に通えるように直すことが皆が住みやすい町を作る道だと思う」と話した。「単純な親切」ではなく「みんなが豊かに暮らす世の中」を作る。私は率直に言って、この件について深く考えたことはありません。私の母国である韓国より日本が子供たちにとって幼い頃の早期教育システムがよくなったようだ。

皆が豊かに暮らすためには何からしなければならないのか。一番大事なのはお互いの配慮のようだ。偏見を捨てて人に接するべきだ。人種差別や歴史的問題などいろいろある。まず人種差別は白人が黄色人種と黒色人種を無視する行為だ。サッカーのイングリッシュプレミアリーグでは試合開始前にホイッスルが鳴る前に10秒間選手たちは片膝をつく。人種差別反対キャンペーンだ。韓国では代表としてソン・フンミン、日本では代表として富安健洋がいる。私は今までヨーロッパ人たちとの接点が多くはないがたまに日本に住む韓国人として韓国が嫌いな日本人たちをたまに見る。これは昔からの歴史的問題だと思うから仕方がない。

差別をなくすためにはどんな努力をすればいいのか。差別は根深いです。誰かの偏見や悪意、いくつかの間違った制度だけで差別が発生するものではありません。それで差別のない世の中を作っていくには予防と教育など色々な努力が必要です。偏見に起因する歪曲された主張に対応するために正しい情報を知らせていく必要もあり、慣行と慣習から抜け出すための訓練も必要です。

ところが、このような努力だけで差別が消えるわけではありません。明らかな差別については、是正または禁止する措置が必要です。差別禁止法だけで差別が消えることはないでしょうが、差別禁止法もなしに差別が消えることはないでしょう。平等は不平等と葛藤を生じさせながら発展します。奴隷制が廃止され、女性が市民権を持

つようになるこのすべての過程は、過去の不平等に挑戦して行われました。

抑圧されていた人々が自分も「人」であることを新たに主張しながら、新しい認識の地平が開かれ、新しい科学的知識が作られ、私たちは知らなかった差別を認識し平等の領域を広げていきます。

したがって、必要なのは現在の葛藤を避けるのではなく、平等と民主主義に対する私たちの社会内原則を作りながら、それに対する社会的合意がなされる未来をまさにこの葛藤の中で現在に操り上げることです。改めて強調しますが、差別禁止法は合意の結果ではなく、私たちの社会全体とその中の一人一人が日常の中で人権と平等を省察し実現する過程として必要な法です。

そして、その日常はいつも今この瞬間に置かれています。誰もが他の民族や人種、あるいは他人から見える違いを恐れたり、彼らに向き合うことに不快感を感じる傾向があるかもしれない。このような傾向が他人と関係を結ぶことを困難にすることから発生したのではなく、私とは異なる文化的背景を持つ人なので分からない部分が多すぎて不便を感じると仮定してみよう。その時、「私になぜそう感じるのか?」、「特定集団に属する人と過去にどんなことがあるのか。「～だったかな?」、「誰かがその相手に対してこんな態度や偏見を持つような話をしたのか?」と。振り返る必要がある。

言い換えれば、相手を固定観念や偏見を持って接していないか、このような態度は本人が意図したものであれ、意図しなかったものであれ、無意識に持っているものである可能性があるので、上から話した質問を自分にしてあげなければならない。

■ 優秀賞

希望を生む社会 ～家族の断絶を乗り越えて～

田 淵 聖 依

世界が一丸となって、取り組むSDGsには、「すべての人に健康と福祉を」という目標があります。それは、あらゆる年齢の人々に健康的な生活を確保し、福祉を推進することを課題としています。誰一人として、取り残さない全人類の共通目標をもはや知らぬ人はいない社会目標となりました。私も母と二人暮らしのため、日本の豊かな社会福祉制度に支えられ、日々の生活が守られています。ここ数年。コロナウイルス感染症におけるパンデミックや燃料・資源価格の高騰と円安による輸入コストの増加などで物価変動が著しく、社会情勢も不安定になりました。それでも私たちの暮らしは、公的な支援を受け、日常生活を送ることができています。私たちは、この豊かな社会福祉制度によって生かされていることを痛感しますが、2022年度に発表された世界幸福度調査では、54位にランキングされています。コロナ禍において、この順位が守られるのはやはり人々の生活が恵まれている証ではないかと考えますが、先進国として結果を見ると低い順位となっています。なぜだろうと疑問に思い社会福祉を学ぶ中で、私は祖父のことを思い出しました。

私が祖父の存在を知ったのは、小学2年生の時でした。私はこれまで母と二人で暮らしており、大学に通うため一人暮らしをする兄と隣町で暮らす祖母からも祖父の存在を知らされていませんでした。なぜなら、祖父は家族を蔑ろにし、自らの家庭を守らず、失踪していたからです。その祖父が余命幾ばくも無く、緩和ケアに入院

していると他の市から連絡が入りました。母はしばらく元気がないように見えました。それは、暴力で家族を支配してきた祖父をまだ許すことができず、祖母が懸命に看護師として働き、母と叔母を育ててくれた苦労を考えると複雑な思いだったと話していました。そして祖母も無理がたたたり、病で手術を繰り返すことになりました。母や叔母は寂しさから少しずつ心を病み、家庭は崩壊していったと聞いて、母があまり過去について話たがらない理由を理解できました。日々の生活は、食べるものさえ事欠く生活だったようで、その時も何度も社会福祉に支えられ、諦めかけた進学もできたと教えてくれました。そして叔母は医学の道へ、母は神学を学んだ後社会福祉を学び、ソーシャルワーカーとして働きだしたそうです。しかし、そこに行き着くまで祖父がした行いの落とした暗い影は、母や叔母、祖母ともに歪んだ家族の絆を断絶してしまいました。母は荒れに荒れ、手もつけられない状態に陥ったそうです。そのため、祖母の黒髪は一気に白髪になったと申し訳なさそうに話しました。私はその原因を作った祖父のことなど思い悩む必要があるのかと放っておけばよいと憤りを覚えました。その後、数週間が経ち祖母から連絡が入りました。叔母が働く病院で担当していた患者さんの様態が急変し、亡くなったことから命の意味を改めて見直し、叔母が祖父に会いに行くことを決めたという内容でした。母も父親代わりのように慕ってきた牧師先生に相談し悩み抜いた末、祖父のもとへ私を連れて面会に行きました。母と二人で行った病室で祖父は、母の顔を見てもう家族と会うことはないと思っていたからか、驚いたように母の名前を呼び、私の顔をまじまじと見ながら「お前の小さい頃にそっくりや」と小さな声でつぶやいていました。私はあれだけ憤っていたものの初めて見る祖父をそんなに悪い人には見えず、母

の顔と見比べ似ていることから家族なんだと実感しました。その時、祖父も末期癌で働けなくなり生活が困窮していたため、社会福祉に助けられ生活援助を受けていました。祖父はその夜、自らの罪を悔い改め、病棟中に響く声でむせび泣く姿が見られたと担当看護師さんが後日、教えてくれました。それを聞いて、母も祖父と向き合おうと毎日見舞いに行き、祖父との今までの空白の時間を埋めるかのように様々な話をしていました。

しかし、その時間も終わりを告げ、末期癌の祖父は再会をした三ヶ月後に天へ召されました。私は祖父との別れの日、三ヶ月ずっと考えていたもうひとつの疑問を母に問いかけました。「なぜ、祖父に会いに来たのか。」と。母はその答に「人をいつまでも恨むと自分が縛られる。それに死にゆく人を恨む必要もない。祖父を許すときめたから。」と答えてくれました。祖父の亡くなった日が今年もまた来ます。祖父が私達に遺したものは、社会福祉の恵みと生きる意味だったかもしれません。祖父との再会をきっかけに私達は、家族の断絶から一つずつ回復しようとしています。母は、私に自らを支え続けた聖書の一節を示し、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を。練達は希望を生む」と伝え、私も社会福祉を守り続けるよう隣人への愛を繋ぎたいと思っています。

壁のない世界へ

水本園乃

「精神病患者監護法」をご存知だろうか。これは1900年に施行された、精神障がい者を自宅などで監禁する「私宅監置」を合法とした法律である。精神医療が圧倒的に未熟だった時代、この法律を基にして、数多くの患者が社会から完全に切り離されて、食事や入浴、運動も満足にできず、一生を座敷牢の中で過ごしたことは決して忘れてはならない事実である。

1950年、この法律は廃止されたが、それで精神疾患の患者が社会に受け入れられたわけではなかった。比較的病状が安定した患者であっても長期入院を強いる、社会的入院の始まりである。帰る場所や受け入れてくれる人がいないから結局入院を続けざるを得ない、主治医が退院を許してくれない。そんな理由で人生の大半を病院で過ごす人々が増え続けたのだ。

先日、そんな患者たちが退院し、地域で新たな生活を始めるドキュメンタリーを見た。症状が軽快しても尚病院に縛り付けられ、家族にも見捨てられた人たち。しかし、一度地域に出ると、その表情は病院内より格段に明るく、そして若々しくなっていた。どんな疾患を持つ人であっても地域社会に溶け込み生活することの大切さを肌で実感するきっかけとなった。

このように、精神疾患をもつ人々の生活の場を地域に移行する動きが近年広がっている。例えば、グループホームの利用者の数は10年間で約2.2倍と大幅に増加している。また、「障がい者総合支

援法」という、知的障がいなどハンデキャップを持つ人々が地域で生き生きと暮らすことを目指した法律が策定されるなど、その動きは加速しているかのように見える。

しかし、それには大きな課題がある。彼らを地域で受け止める受け皿が圧倒的に足りないことである。国は社会的入院や、障がいの入居施設を減らし、彼らを地域に移行することを目指しているものの、ヘルパーやグループホームなどの数は全く足りておらず、結果家族に負担が重くのしかかっているのが現状だ。

では、その受け皿を増やすためにはどのようなことが必要なのだろうか？私は3つのことが大切だと思う。

まず、精神疾患や障がいは誰でもなり得るものであるということ意識し、受け入れる「心のバリアフリー」を推進することだ。新型コロナウイルスにより、世界では抑うつ症や不安障がいが25%以上増加したという。社会情勢の大きな変化は、これからも否応なしに私たちを襲ってくるだろう。だからこそ、それに飲まれた人々を暖かく迎え入れることが必要であると考えます。

次に、一定の経験を持った人が一緒に暮らし、家族のように子供達を養育するファミリーホームのような施設を、精神疾患や障がいを持つ人々向けに作ることだ。職員が交代勤務するグループホームよりも更に家庭的な、受け皿になるだろう。そしてその人手確保のために、ヘルパーの待遇を改善し、世間の福祉業界に対する偏見を無くすことが求められているように思う。

最後に、一般企業や高等教育機関の偏見を無くし、特別支援学校卒業後の多様な進路を確保することだ。現状では6割程度が、卒業後の進路に社会福祉施設等への入所や通所を選んでおり、一般就労や進学者は少なくなっている。入試での合理的配慮や、障がい者雇

用促進法など、門戸は開かれるようになっているが、定員割れでも障がい者の入学を認めなかったり、罰金を払って障がい者の雇用を避ける企業も多い。未だ不十分と言わざるを得ないのだ。私たち自身がもっと彼らに関心を持って、意識改革する必要性が浮き彫りになっている。

このように、受け皿を増やすにはありとあらゆる多様性を受け入れることが不可欠であり、そのためには私たちがもつ、精神疾患患者や障がい者への偏見をなくすことが求められているのだ。

そこで私は子供時代の、多様な人々との関わりが大切だと考えた。何故なら低学年の頃までは、障がいの有無など気にせず遊んでいたが、高学年以降周りの子達が障がいの有無を意識し始めたのを肌で感じたからだ。それは年齢が上がるにつれて、授業内外での関わりが徐々に減っていったことが原因だと考える。私たちは自分に身近でないものをどうしても色眼鏡で見てしまう傾向にある。だからこそ、子供の時から彼らに積極的に関わり続けることが大切なのである。

それを裏付けるかのように、寝たきりの妹をもつ姉へのインタビューでは、妹の障がいを受け入れ、温かく見守る様が描かれていた。彼女は障がいのある人を見守る仕事に就きたいそうで、子供の時から経験が偏見を無くし福祉業界に関わる人を増やすことを実感した。

子供の時から関わりが、将来の多様性のある社会を決定づける。だからこそ、今が精神疾患患者や障がい者との断絶を乗り越え、共に生きていく社会をつくるターニングポイントなのではないだろうか。全ての人が心の壁のない温かな社会で暮らせるように、私たちも意識をあらためていく必要があるように思う。

自然に学ぶ命の繋がり

戸澤愛美

福祉の意味を調べたところ、その始まりは「幸せ」になるでした。私は、植物も動物もどんな人も、この世に生まれた命あるもの、心のこもったもの全て幸福になってほしいと思います。そう考えると福祉とは、生きとし生けるもの全てが幸せに生きられる社会になることではないでしょうか。そして豊かな社会とは、みんながいて成り立つものであって、何一つとして欠けては成り立たない。命と命が繋がることで、一人ひとり生かされていることを実感できる社会が、これからの「豊かな社会」の定義になるのではないのでしょうか。

ところが、今の世の中はコロナ禍や気候危機に加えて、新たにウクライナ危機が折り重なる形で「断絶」の深刻度が増しています。多重断絶の時代に投げ込まれたかのようなのです。わたしは、スマホで日々のニュースなどから世界と「繋がっている」はずなのに、命と命がまったく繋がっていないという逆説に気づいたとき、豊かな福祉社会にはほど遠い地点にいることを感じずにはいられませんでした。この「断絶を乗り越えて」いくためには、やはり足元からの活動を大切にしていきたいと思います。なぜなら、この多重断絶は「大地と人間の断絶」がその始まりだと感じるからです。私には「大地と人間の断絶」を埋められたという自身の体験があります。そこでは、自然同士の共生の在り方から学ぶことが非常に多くありました。

本稿では、この体験を糸口に「人と自然の断絶」、さらには「人と人の断絶」に架橋し、繋がりを大切にできる豊かな福祉社会を作

るための新たな農福連携の推進という提案を行います。制度的な課題解決のためでなく、一人の生きる人間としての尊厳を感じるための農福連携です。農業は自然と向き合う分野です。

私は自分のことが嫌いになり、どう生きればいいのか分からなくなった時、たまたま農業体験の機会に出会えました。そのプログラムでは、農作業をすると同時に、自分と向き合う時間が設けられました。どんな行動をとるにも自分の意思を大事にし、その空間、その時間を大切にし、そこで自分がしたいことを見つけていく。価値創造をしながら新しい発見を楽しんでいく。どんな感情も大切にし、自分の言葉で他者に思いを伝える。

そこで私は、目の前で太陽に向かって必死に生きる作物や木々を見た時、自分らしく強く生きようと思えたのです。すべてを受け止めてくれる自然や目の前で育っている命に救われました。自然は、互に生かしあっているのだと感じられたのです。一つの作物をとっても太陽、水、土、空気の流れに生かされていることを体験しました。その地形という自然の特徴に生かされ、その場所一帯の木々の保水力が高いために土壤の水が健康で、火山灰によってできた良い黒土があってなど、自然現象すべての恩恵を受けながら一つの作物が生長できることを目の当たりにしました。

この「自然」から私たちは生き方を学ぶべきだと強く思います。いかに一人一人が見えない糸で幾重にも、そして無数の方向へと繋がっているか。断絶といわれているが、本当に断絶しているのでしょうか。見えない、見ようとしなない、感じようとしなないだけで、わたしたちは、本当は繋がっています。それを自然の調和の仕方から学ぶことができます。どんな命も大切に、誰かの役に立っていて、その生を終えるのだと。そして終えた生もそこで終わりではなく、新

たな命を生み出し、形は変わっても魂は残り続ける。そこにはあたたかさが残り続ける。

人間に置き換えても同じことが言えるのではないのでしょうか。皆何らかの自分の隠したい部分、見せたくないものを抱えていると思います。そういったものを丸ごと受け止め、本人が本人らしく生きられる社会こそ断絶を乗り越えた豊かな福祉社会ではないのでしょうか。自然は自分があるがまま生かしてくれる場所です。そして農業は、そんな自然からの恵みをもらい、自分の命へとつないでいくことを実感できる貴重な生業です。部屋の中でこもって誰かに支えられたり、人間の中だけで幸せを与え合うだけでなく、農作業で自分が動き必要なものを手にいれるために働いた分、目の前の命が育ち、それを頂くことで自分の身にしていく。自分で自分の命を育む感覚こそ、生きづらさを感じる全ての人が生き生きとできるための第一歩ではないのでしょうか。生かされていることに気づき、感謝することから身の回りの繋がりを大切にできる一人一人になっていく。農業は、人と自然の繋がり、そして人と人の繋がりを取り戻すことが出来ます。さらに小規模でもいいから無理のない範囲で生産者となり、誰かに自分の作ったものを届けることが出来れば、自然と人を繋ぎ、人と人を繋ぐ、そのきっかけとなる自分になれるのではないのでしょうか。大地との繋がりを取り戻す中で、他者のために行動できる自分の能力を知れば、生きることの幸せを得ていけると信じています。

■ 佳作

見えない障がいを乗り越えて

藤原美聖

父の転勤で山梨県に住んでいた小学4年生の冬、友人とスケートに行き転倒し、偶然にもその事がきっかけで、右足のすねの骨の中に腫瘍があることが分かり、大学病院に緊急入院しました。

突然始まった入院生活で、親元を離れた事が無かった私は、何が起きているのか分からず、不安で辛い日々を過ごしました。環境の変化、検査や点滴、心身ともにボロボロの状態でした。

そんな私を心配し支えてくれたのは、家族や親戚でした。病室に毎日御見舞いに来てくれたり、テレビ電話などで連絡をくれたり、励ましてくれました

担当医から「検査手術をして腫瘍が良性か悪性か調べます。」と言われました。結果「線維性骨異形成」という、良性の腫瘍であることが分かり、私も家族もひと安堵しました。

その後、腫瘍を取り除き、人工骨を入れ、チタンで支える手術を行いました。手術では想像を絶する痛みに身体がもたず、これ以上痛み止めを服用出来ないと言われた時は、泣き叫ぶことしか出来ませんでした。

この時、父も母も「自分が代わってあげたらいいのに」と言ってくれましたが、当時の私は、父が働けなくなれば経済的に大変、幼い妹にはこんな辛い思いはさせたくない。『私が』この病気になった事には必ず意味がある、絶対に元気になってみせる」と思いました。

当時小学生だったため、勉強への不安はあまりなかったのですが、整形外科での入院だったので、周りに子供がおらず退屈さがありました。そんな時、隣の病室にいる中学生のお姉さんが、「院内学級」があることを教えて下さり、私も通うことになりました。始めは疲れて病室に戻っていましたが、慣れてきたら本当に楽しく、様々な病気と闘う仲間と一緒に学び合い、たくさんの思い出を作ることができたのは、私の一生の宝物です。

6年生になるまで。再入院、手術、リハビリテーションが続き、やっと退院できたかと思えば、運動制限が付き、学校の体育は全て休むことになり、運動会にも参加できない、と分かった時、運動が好きだった私にとって辛い現実でした。そして、地元の学校に通うようになったとき、私は右足以外は元気で明るく過ごしていたので、久しぶりに会ったクラスメイトから「本当に足が悪いの？本当に運動できないの？体育が好きじゃないから休んでるんでしょ？ずるしないでちゃんとやりなよ。」「傷跡が怖い。私そういうグロいの無理。」と周りから言われ、ある男の子からは、手術をした足を蹴られたこともありました。その時は本当に、悔しく、苦しいものでした。理解しようとせず、話をしても聞く耳をもってくれず、最終的には菌扱いまでされました。このような経験をしたことで、「見た目ではわからない障がい」について、私自身も興味を持つようになり、「ヘルプマーク」の存在を知りました。電車などで、つけている方を見かけたことがあるくらいで、本当の意味を理解しておらず、世の中には様々な理由で援助や配慮が必要な方が多くいることをあらためて実感しました。そして、自分が当事者になったこと、入院中に経験したことを活かし、今度は自分が支える側になりたいと思うようになりました。

中学2年生の夏、山梨県から東京都に戻って来たとき、介護福祉科のある高校ができたことを知り、「絶対に私の人生に必要な。ここで学びたい」と感じ、入学を決意し、合格が分かった時には、自然に涙が出たことを覚えています。入学して、半年が経ち専門的な勉強ができて、とても楽しい毎日ですが、実際に自分がやってみるのとは難しいことがたくさんあります。しかし、これも自身の成長だと思い」日々努力していきたいと思います。

今は、次の実習に向けての準備に忙しいですが、とても充実した毎日を過ごすことが出来ています。これらは全て、今まで支え続けてくださった方々がいるからだ日々、感謝しています。そして、次は、私が恩返しのできる人材になれるよう勉学に励み、多くの人を救える人になりたいです。

■ 奨励賞

ふくしのころ

藤本千尋

わたしのまわりの大人たちは、ふくしのおしごとをしています。人のいのちやせいかつ、からだやころをまもるおしごとです。はたらくばしょは、こうれいしゃ・しょうがいしゃしせつ、じどうそうだんじょ、びょういん、ほいくえん。あーちゃんはいつもびょうしつにいるけど、これないおきゃくさんのところまできりにいくこともあります。

ふくしのおしごとはたいへんです。かみをひっぱられたとか、1日中いそがしくてトイレにもいけなかったとか、いのちをあずかるからとってもせきにんをかんじるとか、みんな、からだもころもたくさんつかっています。おべんきょうしただけじゃできなくて、まい日たくさんちょうせんして、しっぱいしてもあきらめないでかんがえつづけなきゃいけないそうです。たいへんです。でもみんな、にっこりわらって「このおしごとがすき」といいます。

でも、わたしはしっています。ころもからだもへとへとで、「よしっ」ときあいをいれないとおしごとにいけない日があること。うまくいなくて、かなしかったり、くやしかったりしているおかおも。本とうに、すきとおもえるおしごとなのかな？いのちやせいかつ、からだやころをまもるって、「ふつう」にしてあげるってことでしょ？

「おしごと、みてみたい。」

きになってたのんでみたけど、つれていけないよといわれました。

でもかわりに、かかのかよっているびょういんについていけることになりました。かかは、2しゅうかんに1かい、びょういんにかよっています。しょうがいしゃでちょうをもっていて、ふくしにたすけてもらっています。

「のりますか？」

バスがきて、さあいくぞとおもったら、のりものがにがてなかかがかたまってしまいました。ひっばってもびくともしません。「ふつう」にするためのおたすけてたいへんです。わたしは「はやく」とこえをかけました。でも、うんてんしゅさんは「ゆっくりでいいですよ」とわらって、まっけてくれました。

びょういんにつきました。

「しんさつけんをおねがいます。」

きっといつもいわれているのに、かかはじゅんびしてなくて、かばんにかおをつっこんでさがしています。そのうち、うしろにれつができてしまいました。「ないの？」とわたしがあせっていると、うけつけの人は

「いつものあおいポーチの中じゃないですか？」

とこえをかけてくれました。しんさつけんがみつかると、かかはハッとふりかえって、うしろの人たちにあやまりました。わたしもいっしょにペコっとしました。うけつけの人も、うしろのかんじゃさんも、だれもおこりませんでした。

しんさつしつでは、おいしゃさんとはなしました。わたしは、このせんせいがちょっとにがてです。だって、かかをむりやりにゆういんさせたことがあるからです。

「また、かかをにゆういんさせますか？」

どきどきしながらきいたら、

「いまのちょうしならさせません。」

といってくれました。そして、あのときは、かかがじぶんのびょうきにきづいていなくて、いのちのきけんがあったので、まもるためにゆういんさせたんだとおしえてくれました。

「そのせいで、わたしはちょっと、せんせいがきらいだったよ。」とつたえたら、せんせいはへによっとわらいました。

「きらわれても、かんじゃさんをまもるためならしなきゃいけないときがあるんだ。ぼくはおいしゃさんだから。」

にこにこのかかを、せんせいはうれしそうにみていました。せんせいは、ふくしのおしごとを「すき」といったみんなと、おなじかおをしていました。

「みんながいて、しあわせだな。」

かえりみち、かかはいいました。まえにかかがおなじことをいったときは、まわりにふくしのおしごとをしている大人がおおいからしあわせ、といういみだとおもっていました。でも、きっとちがうんだとおもいました。ふくしのおしごとが「ふつう」をまもるんだとおもっていたけど、この日、そうじゃないことにきづいたからです。うんてんしゅさんも、うけつけの人も、ほかのかんじゃさんも、ふくしのおしごとじゃないけど、ふくしのころをもっていて、わたしたちを「ふつう」にしてくれました。かかはこの、ふくしのころが、まわりにいっぱいあるから「しあわせ」なんだとおもいました。

だから、ふくしのころをもった人がふえること。これが、わたしのおもう、ふくししゃかいです。もちろん、ふくしのおしごとをする人も、ふえてほしいです。たいへんなおしごとだから、ふくしのおしごとをする人のころやからだ、いのちやせいかつをまもる

ことも、ふくしのため、みんなのために、だいじだからです。それぞれの「ふつう」へのスタートばしょはちがうけど、そんなカベをのりこえて、みんながあたりまえに、いのちとせいかつ、ころとからだのしんぱいをせずにすごせるしゃかいをめざせるように、わたしも、わたしのふくしのころをそだてたいです。

専門職の部

■最優秀賞

手話の世界へようこそ！…………… 西田 里奈

■優秀賞

私の価値観が生きる、高齢者アパート…………… 石塚 清浩

■佳作

福祉の一步め…………… 長町 明子

社会における居場所づくり…………… 秋谷 進

■ 最優秀賞

手話の世界へようこそ！

西田里奈

ある日私は図書館で「手話奉仕員養成講座」と書かれたポスターを見つけた。手話奉仕員。どのようなものかは分からないが、なんだか天啓のような気がして、すぐに連絡先の市役所へ電話をかけた。

担当者はすこぶる親切にあれこれと教えてくださった。手話に親しみ、使える人を増やすために開催している講座であり、約十ヶ月間学ぶこと。講座修了者はろう者が市役所に来庁する際、奉仕員としてお手伝いのために声がかかる時もあること。

以前から手話を学びたいと思っていた私は、喜び勇んで応募した。

実際に講座に通い始めると、視線、表情、状態の表し方、動作の強弱や緩急など、正しく伝えるための技術を教わった。実際のろう者の講師が紡ぐ手話は真似ることができないほどに速く、感情が伝わり、見ていて惚れ惚れした。

新しい手話表現（「コロナウイルス」「インスタグラム」等）を教わるのも新鮮で、手話は生きた言葉だと実感した。

文法や表現以外にも、ろう者がどのように日常生活で工夫しているかも知った。目覚まし時計の音の代わりに、起床時間に電灯が点くように設定したり、就寝後、もし赤ちゃんが泣いても気づけるように、赤ちゃんが泣くと反応したセンサーが振動で自分を起こしてくれる機器があったり。

十ヶ月の全講座が実り多く、本物のろう文化に少しだけ触れられた。この経験がもっと幼い頃にできるなら、手話人口が増える一助になる

かもしれない。例えば小学校で指文字や簡単な単語を学ぶ授業があれば、気になった子どもたちは、人生のどこかの時点で手話を勉強するかもしれないし、指文字だけでも最低限の会話はできる。

ある日、母と出かけた街中で補聴器をつけた小さな子を見かけた。母はぽつりと「可哀想ね。」と言った。母は極めて善良で誠実な人だ。母は慈しみの気持ちを、可哀想と表現したに過ぎない。しかしその表現にモヤモヤした私は、「生きていけるよ。」と短く返した。

ろう者の講師は「私は耳は聞こえないけど、それ以外は健聴者と一緒」と話した。健聴者の講師は、かつてお孫さんの耳に病気の疑いがあった時、葛藤されながらも「ああ、手話がある。私は孫の支えになれる、と思った。」と話した。まさしく、口から発する代わりに手で発する。それだけだ。

私はいま老人ホームに勤めており、ろう者の利用者様とも話す。

「背中に薬を塗りますね。」

「夜は眠れましたか？」

簡単な会話でも伝わると嬉しいし、利用者様も表情がぱっと華やぐ。そんなやり取りを見て手話に興味を示してくれた同僚に、私は「手話って楽しいよ！」と講座を紹介したり、指文字の資料を渡したり、小さなアピールをしている。

自分のしたことに意味があるか分からなくても、自分のしたことが誰かの意味になるかもしれない。

そんな中、先日素敵なことがあった。

敬老の日の特別メニューで、お造りや赤飯といった数々のご馳走が出た日、先輩が言った。「今日、〇〇さんが言ってることが初めて分かった。こうやって顎をぬぐって、おいしいって言った。笑顔で、おかわり、って空のお茶碗を差し出されて。分かって私も嬉しかったわ。」

そう聞いて、私は胸がいっぱいになった。誰かと心を通じ合わせる喜び。

心の断絶をなくすためにできることはなんだろう。まずは関心を寄せ、「あなたを知りたいと思ってるよ。」と意思表示をすることではないだろうか。そして、共通する言葉を使うこと。片言でもいい。

流暢に話せないと恥ずかしいなんてこと、ろう者は気にしていない。

「手話の世界へようこそ！」

と、満面の笑みで待っている。

■ 優秀賞

私の価値観が生きる、高齢者アパート

石塚 清浩

終の住処と言われる特別養護老人ホームに29年勤め、今春退職した。初めの9年は生活相談員補として、お年寄りと接し、残り約20年は介護員を務めた。特養の介護職の仕事は、すさまじく一時も休む暇がない。毎日、決まった仕事を順序通りにこなすだけで、精一杯で、時間だけがあつという間に過ぎる。それは、一人一人のお年寄りと向き合い、よく考えることが不可能なことを意味する。だからしてか、各お年寄りの処遇は、主に生活相談員やケアマネージャーが、介護員からの情報を基に、介護計画を考え立案する。

しかし実際、お年寄りに一番長く携わっているのは、介護員なのだ。朝起きてから、排泄、食事、入浴、娯楽、睡眠状況迄、24時間全てに手を掛け、いつも見守っている。家庭で言えば、お嫁さんだったり娘さんと同じだ。ゆえに、介護員には家族と同様の情が芽生え、親身になって、細かい事まで色々考える事が出来る。

相談員や他の部署の人達は、このお年寄りが幸せに生きていくのには、何が大事で何が必要かを考えてくれるが、介護員の想いとは、多少の温度差を感じる。それは、やはり各人の業務上での価値観の違いが大きく影響していると私は思う。

身体介護では、看護師と介護員の連携がすごく大切だ。ケアのやり方次第では、その人の生命に関わる事が多くあるからだ。医師の意見により立てられる看護計画とケアマネージャーが立案する介護計画は本来、整合性があるようになっているのだが、医療の価値観

と介護の価値観の差がここでも、見え隠れする。

お年寄りの価値観、家族の価値観、各担当者の価値観、さてどの価値観が一番大切か。もちろん、お年寄り個人の価値観が最優先で実践されなければならない。

以前受けた研修で、「その人が、その人らしく暮らせるのには、どうしたら良いか。」という議題検討があった。グループワークで、その人の生活歴、家族構成、職業、好きなもの、性格などの情報収集をして、6名が各自意見を述べた。生活相談員、ケアマネージャー、看護師、副園長、介護員達は、それぞれの立場で、様々な価値観を踏まえ、必要なケアを熱く語りあった・・・。

お年寄りは、戦後を生き抜いてきた人生の師匠である。私達は、彼らの生き様、思想観、価値観などを、とても想像し理解出来ないであろう。それなのに、どうして「その人らしい生活」を考える事が出来るのか。分かった様なふりをして、こちら側の価値観を丸投げするようなものだ。

しかし、ここに支援を必要とするお年寄りがいる。誰かが手を差し伸べなければ、その人の人生は終結してしまう。要介護者の、必要なケアは何かを、私達は、しっかり見い出さなければならない。

今、このお年寄りを皆で支え、援助する術を習得できたなら、近い将来、私達が要支援者となった時には、その術を活用したケアが提供され、明るい未来が待っているのである。

「その人がその人らしく…。」自分に置き換えると「私が私らしく。」半年後に還暦を迎える私は、今この言葉の意味を、少しだけ理解出来る歳になった。

若い時は家族のためと考え、不得手な仕事でも歯を食いしばって、頑張った。研修会では人前で話すのが苦手な、メモ紙に書いて発表

した。嫌な上司の誘いも断らずに、カラオケで下手な歌を歌い、接待した。四十の手習いで、始めた介護職は1年間、覚える事が多く苦しい毎日だった。10年後には、私には不釣り合いの主任をまかされ、職員間の人間関係による苦勞で心底疲れた。そして定年を前にして体力の限界を感じ、今春59歳で介護員を退職した。

私は今、ボイラー室で一人、機械管理の仕事をしている。私が私らしく暮らす生活、それは『自分に合ったペースで、欲を出さず、一日一日をすこやかに暮らせること』だった。お陰様で自分に相応しい人生を手に入れることが出来た。

特養の仕事を経験した私は今、想っている。現在の老人施設、老人病院などは、集団的なケアを行う建物の造り方であり、「その人がその人らしく。」の考え方には、ほど遠い。そこで私は介護医療連携型高齢者アパート政策を提案する。

これからは、様々な価値観を持った要介護高齢者へ、健やかな暮らしを送れる住処を提供しなければならない。そのためには、この高齢者アパートの直ぐ近くに、高齢者を支援できる人・介護人・看護人・医師が常駐し、サービスを提供する事だ。

老人保健施設と高齢者下宿の混合型と考えて頂きたい。高齢者夫婦や独居高齢者が、安心して介護サービスや看護、医療サービスを受けながら、個人の価値観を尊重した快適な人生を送る事が出来るのだ。高齢者が、その人の価値観を取り入れた、個別の快適な人生を健やかに送ることが出来る方法だと私は考えている。

介護保険制度を上手に取り入れた高齢者アパートを、私達への将来設計図として提案する。

福祉の一步め

長町明子

その集合住宅は大通りに面したカー用品店の裏手にあった。3人も乗れば窮屈になるエレベーターの扉が開くと、昼でも薄暗い廊下が細く長く続いている。家のブザーを短く押し、返事を持たずに鍵のかかっている鉄のドアを開ける。もしも押し入った物盗りに強殺されたとしても、彼はそんな恐ろしさは取るに足りないことだと思っているに違いない。むしろそうなることを望んでいたかもしれない。私が挨拶しながら2DKの室内に入ると、奥の部屋で横たわった彼は明るい声で挨拶を返し、上半身全体を小さくスイングさせて来訪の喜びを表現してくれた。独居の自宅には近所に嫁いだ一人娘が5歳の男の子を連れて毎日見舞いにやって来る。彼は当時難病に指定されたばかりの筋萎縮性側索硬化症（ALS）という不治の病を告知されていた。余命を可能な限り在宅でと望む本人の意志を尊重し、往診医、訪問看護、訪問介護が入れ替わり立ち替わり訪室し、彼の生活全般をサポートした。

ヘルパーだった私が初めて訪問した日、上背のある彼はトイレの壁に寄りかかってかろうじて立位を保っていた。しかし次に訪れた時にはもう、四肢はコンニャクのようにグニャグニャと萎えて全く立つことが出来なくなっていた。体中の全ての筋力を奪うのに、脳の思考だけは最期まで機能させ続ける、そんな残忍な病の進行は容赦ない速さで彼を寝たきりにした。嚥下する筋力さえ侵されつつある彼に、ミキサー食をこしらえ食事と食後1本のたばこを介助する

ところまでがヘルパーの仕事。愛煙家の望みを叶えること以外にも、終末期の彼の日常を彩り、何とかして気を紛らわせる手立てはないものかと、当時のケアスタッフは皆、躍起になっていた。年の瀬には皆で枕元を取り囲み、クリスマスソングやホークスの応援歌を歌った。年始にはおせち料理を作ってミキサーにかけ「これは黒豆、これは海老」と説明しながら一匙一匙彼の口元へ介助した。原型をとどめないそれらの料理を彼は目を閉じて大事そうに喉の奥へと運んだ。おせちの味も、陳腐で騒がしいテレビの正月番組も全部ひっくるめて、彼は過去の正月と最後の正月を記憶に刻もうとしているかのようにだった。

「もう煙草はよかです。」その日、彼は静かにそう言って沈黙し、私は言葉を探していた。「長町さん、この病気は自分で死ぬことも出来んとですよ。」

彼の声はとても穏やかで普段と何ら変わらないように聞こえたが、私は息を呑むより他なかった。

彼はコミュニケーションの断絶が迫るのを察していたのだろう。数日後ついに呼吸筋にも魔の手が伸びて、気管切開のステージに達した。孫の入学式まで生きていたいと話していたのだが、春まだ遠い雪の夜に搬送、即、声を失った。以来、彼のコミュニケーションツールは目の動きで読み取る文字盤だけとなった。彼からのメッセージを受け取ろうと、我々は固唾を呑んで彼の視線の先を凝視し、文字を追った。「ゲ・ン・カ・イ・ナ・ダ・ノ…」文字盤はホークスの応援歌をなぞっている。一同、泣き笑いで合唱した。

最後に会った彼は、病院の詰め所の隣室でたくさんのチューブに繋がれており、もはやかける言葉が見つからない姿だった。瞼の筋肉を持ち上げる力も無くなっていたが、聴力は失われていなかった。

耳元で私が名乗ると、彼の動かない左頬に一筋の涙がつた。底知れぬ無念に包まれ、私は彼に気付かれないようにもらい泣きした。

入院と同時に訪問介護の仕事は終了し、私は彼の居宅から足が遠のいていた。その日は休日、食材の買い出しのために車を走らせているつもりだったが、どういうわけか到着したのはカー用品店で、何か買う物があるんだっけ?と考えながら車を降りて歩き出した。店の前の電柱に、ありふれた名字の葬儀案内の看板がくくり付けられている。呼ばれたんだ!と思った。踵を返して車に戻り、そのまま葬儀場の前まで行ってみた。やはり彼の葬儀だった。

棺の脇には文字盤がひっそりと置かれていた。苦痛から解放された彼を労い、遺族と挨拶を交わして外へ出ると、凜とした外気に降り注ぐ陽射しが驚くほど暖かった。新しい季節の気配が感じられ、天を仰ぐと、彼の穏やかな声が聞こえた。「もう文字盤は要らない。」

あれから彼の娘さんは、子どもの入学と同時にヘルパー研修を受講し、訪問介護の仕事に就いたと聞いた。私はというと、意を決して看護学校の門を叩いた。遅ればせの看護師となって十余年が過ぎても、当時の濃縮された時間に思いを馳せる時がある。

自分に何か出来ることはないだろうか、と考えることが福祉の一步であり、新年の礎となる。断絶を乗り越えて生き抜いた彼がそれを教えてくれた。忘れがたい光景とともに改めて追悼し、彼に感謝を捧げたい。

■ 佳作

社会における居場所づくり

秋谷 進

私は小児科神経医として、20年以上、障がい児及び障がい者医療に携わっている。私のことを頼りにしてくれる彼らがいること、そのことが私に自信を持たせ、誇りを持たせてくれている。そんな中で、私はいつも思うことがある。それは、「障がい者の社会における居場所作り」だ。これにおいては、まだまだ整備ができていないと、言わざるを得ない。「整備」という言葉を使うことも、どうかと思うが、ちょうどいい言葉がないので、あえて使わせてもらっている。

私が言いたいのは、「障がい者」と、上から目線で健常者が放つ言葉。それは本当に正しいことなのか、と疑問に思うところではある。この事に対して、疑問を持つことが大事であり、疑問を持たなくなってしまうのは、いつまで経っても、私が目指したい世界は訪れないだろうとさえ思っている。

健常者と障がい者を比較すれば、それは違いがあるというのは、明白なことだ。だがそれは「違う」だけであって、平等にしないということにはならないのだと思うのだが、私の考えは間違っているだろうか？

「障がい者」に対しては、差別や偏見がどうしてもつきまとう。しかし、ちゃんと個々を見てほしいのだが、健常者であれ障がい者であれ、人は人だし、対等に扱うことが当然ではないだろうか。友だち関係、恋愛関係であってもそうだ。

しかし、同じ人間だとしても、障がい者には支援が必要だということも忘れてはいけない。この支援を行うことで、差別を行うのではなく、何の障壁もなく支援を行うことができれば、障がい者と健常者のバリアフリーとなるのではないかと、私は考えた。

初めは医師として彼らと接していただけなので、社会における居場所づくりが必要だとは思っていなかった。だが、幼少期から見てきた彼らが大人になり、社会に出ていくところを見ているうちに、軽度の障がい者が就職で苦勞をし、悩んでいる姿を目の当たりにしたのだ。

2013年に施行された、障がい者総合支援法施行に基づき、障がい者などが地域で普通の生活を営むことを当然とする福祉の考えから、障がい特性やライフステージに応じた支援が整備されつつある。この法律ができるまでは、本当に就勞に関しては「ひどい」という言葉に尽きた。例えば、軽度の障がい者には障がい者枠に当てはまらないため、100社を面接しても落ちたり、中には面接中に酷いことを言われて帰りの電車で飛び込んでしまったり……ということもあった。中には、軽度では就職ができないため、障がい者としての診断書を書いてもらえないかという相談を受けたこともある。

人生というのは、学校を卒業してからのほうが長い。社会の中にいかにして自立のための居場所作りをするのか、学生生活の段階から考えていく必要がある。学校生活と違い、就勞時の環境変化は健常者でも困難なものだ。それが障がい者となれば、さらに困難を極めることは明白である。さらに彼らの希望する就勞と現実には乖離があることが、いまだに多いのも事実。「軽度」や「傾向がある」といった障がい者でも、知り合いのツテをたどることでようやく一般就勞に至るといった具合だ。彼らにも夢があり希望している職業がある

のだが、そういったところでの就職ができず、福祉就労となることも多かった。

彼らの人生なので、何が幸せなのかは人それぞれだが、金銭的な自立を目標にするのであれば、福祉就労では難しいということも知っておいてほしい。知的な特性であったり、対人関係における特性であったり、それぞれ特性が違うため合理的配慮、バリアフリーな社会の実現が必要なのである。

ただ私は一つ疑問を持っていることがある。それは一般就労にしる福祉就労にしる、就労だけが金銭的な自立や自己肯定感を高める日々繋がっている社会に対してだ。就労以外のことでも、人間的な成長につながる社会にする必要があると、私は考えている。なぜなら人は人によって支えられ、強くなり、人として成長するものだからだ。私自身も人々に支えられ、夢の実現に向けて後押しされてきた。彼らがいたからこそ、今の私がいると言っても過言ではない。

「障がい者の社会における居場所作り」を実現するため、10年以上前から講演会で障がい者にとって何が必要で、どういう社会を実現すべきなのかを訴えてきた。そうやって人の輪をつなげていき、有志の輪は広がっていった。社会の在り方を変えることが必要といえる。医療現場そして教育現場で講演会をし、理解者を増やしながら、私のみならず私を支えてくれている人々ともに不撓不屈の精神で、これからも「障がい者の社会における居場所作り」の場を、増やしていくために歩み続けていくつもりだ。

一般の部

■最優秀賞

共に紡ぐメロディー…………… 後藤 里奈

■優秀賞

マーさんの安全標語…………… 大西 賢

音楽が大好きだから～いきていくために…………… 西濱優衣香

地緑…………… 田中 一慶

■佳作

園芸療法を通した豊かな福祉社会の実現…………… 宮永 幸則

想いを 声に、カタチに …………… 小松崎有美

うそから出た誠…………… 東 のぶこ

■ 最優秀賞

共に紡ぐメロディー

後藤里奈

「私も弾いてみたいな。」

今から十年前、姉の通院に付き添った帰り、駅の構内でピアノを弾いていた若い女性を見て、姉がふと呟いた。私は意外だった。姉と私は子供の頃ピアノを習っていたが、今ではもう弾くことはなく家にあるピアノは埃を被っていたからだ。だが、私は姉の願いをなんとか叶えたいと思った。そして「いいね。今度一緒に連弾してみよう。」と誘った。すると姉は嬉しさと不安が入り混じったような表情をした。姉はその頃、全身の筋肉が徐々に衰える神経の病を患っていたのだ。症状が進行すると、歩くことや話すこともできなくなる残酷な病気だった。ピアノを弾けるようになるまで、指がきちんと動くかどうか分からない…。しかし、病気になって以来ふさぎ込みがちだった姉が自分からやってみたいと言ってくれたことを、私は大切にしたいと思った。私の提案に、姉は「そうだね。いいりハビリになるかも。」と言ってくれた。こうしてその日から、姉と私の「猛特訓」が始まったのだ。

姉に弾きたい曲を尋ねると、シューベルトの「アヴェマリア」だという。誰もが知る名曲だ。早速私は楽器店へ行き楽譜を購入した。だがハンデのある私たちが弾くには難しかったため、音を省いて簡単に編曲した。ところが、いざ練習を始めると想像以上に困難を極めた。ピアノを習っていたとはいえ、長年のブランクはそう簡単に取り戻せるものではない。体が思うように動かない姉にとってはな

おさらのことだろう。思えば、私がピアノを習い始めたのは姉の影響だった。異母姉妹である私たちは幼い頃折り合いが悪く、私は姉に対して勝手に敵対心を抱いていた。「お姉ちゃんには負けたくない。」という一心で姉の真似をしていたのだ。一緒に連弾をしようと言ったのは、そんな姉との溝を埋め、少しでも元気なうちに良い思い出を作っておきたいという気持ちからだった。

ピアノの練習を始めることに対しては、姉の主治医やケアマネージャーの方も賛成してくださり、いろいろとアドバイスをくださった。練習が思うように進まず焦ることもあったが、病気のせいで仕事を辞め、生きる希望さえもなくしかけていた姉にとって、一つの目標ができたのは大きな進歩だった。そして数ヶ月後、なんとか通して弾けるようになった。ピアノを弾けるようになったことももちろんだが、私は姉が本来の明るさを徐々に取り戻してくれたことが何より嬉しかった。すると、その様子を聞いていた担当看護師さんが、ある提案をしてくださった。病院の一角を借り、他の患者さん達の前で連弾を披露してみてもというのだ。ちょうど、小児病棟のプレイルームには電子ピアノがあった。まだ人前で聞かせられるレベルではなかったが、「入院中の子供達やご家族の方に少しでも喜んでいただけるのなら。」と、私たちは引き受けることにした。この挑戦が、また姉の生きる希望になればよいと願いながら、私たちはさらに練習を続けた。

発表の当日、プレイルームには予想以上の人が集まった。皆さんに喜んでもらえるだろうか。途中で止まってしまったらどうしよう…。と、緊張と不安でいっぱいになったが、「間違っても大丈夫。せっかくの機会を楽しもう。」と励まし合い、呼吸を合わせて弾き始めた。この「アヴェマリア」という曲は、どんなに辛く苦しい世の中でも、

希望と信仰の心を持って生きていけるように。との祈りと願いが込められた曲だ。まさに私たち家族の願いを表したような曲だった。弾いているうち、これまでの練習の日々、幼い頃の姉との思い出が甦り、胸がいっぱいになった。姉が病気になったのは辛く悲しいことだが、大人になってからこうして一緒に連弾できる日が来るとは思ってもいなかった。演奏はお世辞にも上出来とは言えなかったが、弾き終わるとその場にいた方々から温かい拍手をいただき中には涙を流してお礼を言うてくださる方もいた。

姉が障がい者になってから、私は自分にとって空気のように馴染んでいた日常というものには、目に見えないバリアや、人を容易に受け容れない棘のようなものがあると感じていた。しかし演奏後のその場には、障がい者と健常者、病気の人と健康な人、それぞれの間の断絶はなく、ただひたすらに穏やかな時間が流れていた。与えられた状況のなかで、その人にとっての幸福の在り方を見つけ、その実現のために助け合っていくことが、本来の福祉の在り方なのかもしれない。

五年前、姉は長い闘病生活を終えてこの世を去ったが、最後まであの連弾のことを何度も思い出しては話していた。私たちの間にはかつての溝はもう消え、あの美しいメロディーが紡がれている。

■ 優秀賞

マーさんの安全標語

大西 賢

私の勤めている工場にその人がやってきたのは、もう十年以上前のことだ。タイ出身の彼は名前の一部を取ってマーさんと呼ばれていたが、職場にすんなり溶け込んでいたかという、そうではなかった。

よほど勉強したのだろう、マーさんは流ちょうな日本語を話す人だったが、その一方、ひらがなや漢字を読むのは苦手なようだった。社員たちに書類が渡されたときには、タイ語に翻訳するわけにもいかず、近くにいた人が分かりやすい日本語でマーさんに書類の内容を話して聞かせるのだった。

社員五十人ほどの小企業にあって、外国人労働者はマーさん一人だけだった。ちょうど、中学校のクラスに外国人生徒が一人だけ転校してきたような感じで、あまりなじめていないようだった。

「稼いだお金の大半は、母国の両親に送金しているらしいよ。」

そんな話を聞いて、私はたいそう感心したものだが、同僚たちの反応はそれとは違ったものだった。

「給料の高い日本でまとまったお金を稼いで、ある程度の金額を貯め込んだら国に帰るのだろう。」

そういった考えが同僚たちの一致した意見だった。マーさんは正社員として雇用されていたが、ある程度の金額を稼いだら国に帰るという目で見られていたため、周囲からはアルバイトや臨時雇いのように見られていた。

浅黒い肌。日本語の読み書きはできない。会社で支給される弁当を一人だけ食わず、いつもパンを食べている。そんな小さな違いが積み重なって、「マーさんは自分たちとは違う人」という認識が社員たちのなかに広まっていた。国境による断絶はそこにたしかにあったのだ。

仕事が終わってみんなで居酒屋に飲みに行こうとなっても、マーさんだけは誘われなかった。勤勉な労働者であり、仕事ぶりには問題はなかったのだが、私も含めて、みんなマーさんのことを一歩離れた目で見ている。みんなで飲みに行く姿を見ながら、一人残されたマーさんは、どんな気持ちだっただろう。

そんなある日、会社で安全標語を募集することになった。フォークリフトで高い場所から重い荷物を下ろしたり、カッターナイフを使ったりする工場である。ときたま、ケガをする社員が出ていて、問題になっていた。

「一人一つ、安全標語を出すように。」

主任からそう言われて、みんなでうんうん考えた。安全はたしかに大事だが、普段から意識しているわけではないので、なかなか思いつかない。他の人も同じみたいで、締め切りが迫っても、なかなか集まらなかった。

そして、全員が出した安全標語が張り出される日がやってきた。苦勞したわりにはそれほど「ぱっと」した作品は見当たらず、

「作業中はヘルメットをきちんとかぶろう」

とか、

「指さし確認を徹底しよう」

といった平凡な標語ばかりが並んだ。そんななかで、異色の存在感を放つ標語があった。マーさんの標語である。

「～しろ、とか、～をやれ、といった命令口調はやめよう。指示、指導するときは、ですます調で話しかけよう。そして、相手に何かを頼んだら、必ず最後に『お願いします』と言おう」

これがマーさんの発案した標語だった。どうやら、マーさんが自分で考え、口頭で主任に伝え、主任がそれを日本語の文章として紙に書いたらしい。

おお、これは——。みんながこの標語を見て、ちょっとどよめいた。

この工場では命令口調が公然とまかり通っており、「あの荷物早く持ってこい。」とか、「捨てる段ボールは階段の下に置いておけ。」といった言い方が普通だったからである。

マーさんの標語は、職場のある種殺伐とした雰囲気鮮やかに指摘した。実際、マーさんの標語が優秀賞に選ばれ、みんながですます調で話し、語尾に「お願いします」をつけたところ、社内の雰囲気はとても良くなった。ある女性事務員が、

「みんな紳士になって、いい職場になった」

と言っていたが、言葉遣いの大切さを外国人のマーさんから指摘されたことは、意外でもあり新鮮でもあった。マーさんの提案は社内の人間関係に良い影響をもたらし、結果的にその標語は無事故につながっていった。

国境の断絶を乗り越え、全員でいい職場にする。マーさんの標語は、みんなに明日も気持ちよく働こうという気持ちにさせたのだ。

標語の件があってから、マーさんも飲み会に誘われるようになった。ジュースしか飲まないマーさんだが、そこにはみんなの仲間入りをした、素敵な笑顔があった。

■ 優秀賞

音楽が大好きだから～生きていくために

西濱優衣香

「障がい立派に乗り越えてこられたんですね」「多くの困難があったでしょうが、さまざまな事を乗り越えピアノを仕事にしておられるんですね。」「どうやって乗り越えられたか話してもらえませんか。」私は発達障がいを抱えながら音楽活動をしているが（ピアノ講師&演奏家&作曲家）これを知った人からは、もれなく上記の言葉が返ってくる。

障がいのある人が、なんらかの活動していると必ずとっていいほど「障がいを乗り越え〇〇の活動をしている」という紹介のされ方をする。この言葉を聞くたび私は違和感を覚え心は悲しみに覆われる。私は果たして乗り越えてきたのだろうか。答えは「NO(ノー)」である。私は決して乗り越えてなどいない、出来る事と出来ない事の差が大きい私は、自分の得意を生かし毎日活動をしている。そして生活の中では今も多くの困難を感じているが、それでも私は生きていかなければならない。だから私は自分の出来る事を仕事にし、もがきながらも必死で前を向き歩み続けているのだ。

どんなに頑張っても取り除く事も治すことも出来ないのが、この障がい。時には「生きづらい。」と涙し「私から障がい離れてくれないかな。」と思うこともたびたび。でもこれからも共に歩いていくものとして、上手に付き合う方法を日々考え生きているのが私の真の姿である。私は、他の障がいの方の話の聞いたわけではないので間違っているかもしれないが、障がいがある多くの方が「乗り越

えたわけではない。」と仰ると想像する。とても悲しいことだが「乗り越えた」と言う表現を使用されるのは、私が知る限りでは障がいを抱えてない方である。その表現の裏には「障がいは不自由なことだから乗り越えなければならないもの。」「障がいを持つ事は不幸な事だから乗り越える必要がある。」「障がいがある人は乗り越えなければ幸せを掴めない。」そんな思い込みや偏見が潜んでいるように思う。

ここで「乗り越える」という意味を調べてみた。『困難な状況を苦心して克服する』とあった。確かに不自由で困難な状況にぶち当たる事も多いのが障がいだが、それは克服すべきものかと問われると、やはり答えは「NO.」である。私は、これからも障がいと一緒に生きるのであって決して克服など出来ないし、克服すべきものでもないと感じる。

少し話が変わるが（先にも触れたが）私は今年の春、音楽大学ピアノ専攻を卒業しピアノ講師・演奏家・作曲家としての道を歩んでいる。この活動をしているのは私が「音楽が大好きだから、そして得意がピアノを弾き、作曲をする事だから。」である。これは先に書いた「出来る事や得意を生かし活動をしている。」と一致する内容なのだ。乗り越えたから、この活動をしているわけでも乗り越えるためにこの活動をしているわけでもない。どの人も好きな事を仕事にしていきたいと考えるように、私も一人の人間として同じことを感じ、好きを押し進める中で、それが得意になり仕事になっていったのが、今の状態である。にもかかわらず「乗り越える。」という言葉が使われてしまうのは障がいのある人、ない人、その間には見えない壁や意識をしてない心の隔たり、すなわち（心の）断絶があるからではないだろうか。

ところで、心の隔たりを縮める取り組みとして私が運営するピアノ教室では「障がいがある方だから〇〇の方法を取ろう。」や「障がいがある〇〇さん。」といった考え方・見方をしていない。一人一人の様子を見「この辺が、この人の得意だから伸ばしてあげよう。」「この伝え方だと分かりにくそうだから、伝え方変えてみよう。」「楽しそうだから今度もこの方法取り入れてみよう。」「つまらなそうだからアプローチを変えてみよう。」「他の方法だと出来るようにならないだろうか。」と言う感じに、一人の尊い人間として接する毎日だ。

人の可能性は無限大である。もしここで「障がいのある方だから」と私がどこかで諦めの気持ちを持ってしまうと、その人の可能性をつぶしてしまう事になると思うのだ。また演奏家・作曲家としても私は、見えない壁を取り除くべく奮闘中だ。二年前には障がい者芸術コンテスト（＝ゴールドコンサート）の全国大会に出場し審査員特別賞を受賞した。（作曲とピアノを担当）このコンサートは「障がい者が頑張りました。感動をありがとう。」と言うものではなく完全に技術力・表現力を競うコンテストである。

心の壁をなくすには、このように多くの方に知ってもらい取り組みも大切だと考える。私はこれからも自分の音楽表現を駆使して障がいがあるなしに関わず「素晴らしい音楽は素敵だ。」と言う事を伝え続けたい。私の取り組みは、まだまだ途上である。社会全体が断絶を乗り越える事で障がいのある方が乗り越える事なく社会活動が出来る日がくるまで私は自分が出来る取り組みをやり続けようと思う。

地 縁

田中一慶

子ども会主催のラジオ体操、PTA主催の親子ボランティア、有志で実施する読み聞かせ教室。コロナ禍のため、全て中止となった。「我が子が小学校に入学したら、全て参加しよう」と思っていた私にとって、寂しいものだった。長男は、コロナ禍の中で入学した。授業参観、運動会、遠足。学校行事も全て中止。家業を継ぐため教員を退職した私にとって、大好きな学校と繋がる機会がない生活は物足りないものとなっていた。

「PTA会長になってくれる人を探しているのだけれど……。」

友人から相談され、引き受けることにした。一年目は副会長、二年目に会長をつとめることになった。コロナ禍をきっかけに、会社や自治会では活動の見直しが行われた。それはPTAも同じ。副会長をつとめた昨年、委員会を二つ廃止した。時代の変化に合わせて、形を変えることにした。全家庭にアンケートを実施した。「簡略化してほしい。」「負担を減らしてほしい。」「活動内容を再検討してほしい。」といった声が数多く寄せられた。その中の一つに、こんな声があった。

「コロナ禍で簡略化や削減が叫ばれていますが、保護者同士の繋がりの場がほしいです。」

名簿を片手に調べてみた。コロナ禍で小学校に入学した家庭は三分の一もあった。保護者同士の繋がりを作ったり広げたりする活動こそ、PTAが行うべきことだと確信した。

学校の先生とPTA役員で集まり、コロナ禍でもできることを話し合った。半年間の相談を経て、三つのことを始めることにした。

まずは、PTAの公式LINEを立ち上げた。コロナ禍で保護者が一堂に会することはできないが、保護者同士が会うことは多くある。会った時に話題にしてもらえるような内容を発信していくことにした。PTAの役員になってから、学校に行くことが増えた。夕方、お迎えに来る保護者を多く見かけた。その時、保護者はみな、10分ほど談笑する。この時間も保護者の楽しみの一つなのかもしれない。談笑のネタとなるような、談笑に入っていきやすくなるような、そんな内容を発信した。修学旅行の最終日、各教室の明かりがついた。漆黒の中に浮き上がる校舎。運動場のライトもついた。校舎と校庭が緑色に照らされ、リゾート地のようにきれいな光景となった。しばらくすると、修学旅行生を乗せたバスが帰ってきた。

「おかえりー。おかえりー。おかえりー。」

と、手を振りながら出迎えてくれる先生方。その様子を発信した。「あたたかい学校」「すてきな空間」という返信が届いた。後日、学校へ行った時、こんな会話が耳に入ってきた。

「修学旅行の日の校舎、見た？」

「見た、見た。すごくきれいで、写真、保存しちゃったよ。」

公式LINEを通して、多くの保護者に喜びを提供することができた。

次に、保護者によるボランティア活動を企画した。コロナ禍のため、短時間で実施可能なことにした。それは、運動場を囲う側溝の清掃。側溝に落ちた砂を、運動場に戻す作業。二十二名の保護者が参加した。多くはコロナ禍で入学した家庭だった。

「弟、友だちですよ。」

作業中、そんな声も聞こえてきた。兄弟姉妹や共通の知人の名前が飛び交い、楽しい雰囲気で作業は進んだ。ボランティア活動を通して保護者同士が繋がる、貴重な時間となった。

「やっと、会えたね。」

これは、私が発した言葉。我が子からの話を通して、友人の子どもが入学したことは知っていた。しかし、その日まで、会う機会がなかった。久しぶりの再会となった。

「PTAからの文章に田中君の名前が出ていて知っていたけれど・・・やっと会えたね。」成人式以来だろうか。再会できた喜びを共に味わうことができた。

年度末に企画しているのは、ドッジボール大会。PTAの形が変わることに合わせて、「おやじの会」が解散することになった。おやじの会は、行事の準備や片付けなど力仕事を担っていた。今までの感謝の気持ちを込めた行事を企画した。おやじの会をきっかけにして、保護者仲間を見つけた人もいる。行事の中止が続いているため、ドッジボール大会を楽しみにしている「おやじ」が多くいる。会は解散となるが、これからもずっと、繋がりは続いていくにちがいない。

コロナ禍で保護者が繋がる機会はなくなった。同時に、PTA活動の見直しも始まった。本当に必要な活動だけを残すことになった。「本当に必要な活動とは何だろう？」と考えた時、頭から離れなかったのは「縁」という言葉。「令和」という時代に生き、「三ノ輪」という地域に住み、「小学校」という場所を中心にして、私たち保護者の「縁」は繋がっている。コロナ禍でも絶たれることのなかった「地縁」をこれからも大切にしていきたい。

■ 佳作

園芸療法を通した豊かな社会福祉の実践

宮永幸則

農業はさまざまな魅力を持った生命産業であり、福祉の現場でも大きな役割を果たすことが知られている。私は農業を実践する者として、現場での知識と実践力を身につけ、豊かな心の輪を広げるために福祉やリハビリテーションの分野で活用を広げていきたいと模索を続けている。私は農業の魅力を発信するため、都市郊外に農地を借りて園芸療法に取り組んできた。園芸療法とは、植物や園芸・農芸作業を介してもたらされる癒しの効果を利用した新しい福祉の形であり、家庭内で植物を栽培し楽しむ段階から、医療機関による代替治療の分野や地域の街づくりをはじめ、生涯学習や障がい者福祉まで、幅広い分野での活用が実践されている。農業生産や自然に触れる機会が少ない地域社会のなかで、健常者と障がい者が交流しながら農業を体感できる場所や空間を作りあげていく活動に、私は大きな意義を見出しているのだ。障がい者福祉の現場では、園芸療法は大活躍している。精神病患者や、心身に障がいを持つ人などが植物と関わることによって癒しの効果が得られ、明日に希望を持たたという話はよく耳にすることだ。

私は、東京都世田谷区の障がい者福祉施設で実践されている事例を調査した。ここでは、年間を通して園芸療法をリハビリテーションとして導入している。その一環として、プランターを利用して野菜や草花の生産を行っている。清潔な培養土を使用して、極力素手で入れるように指導を行い、手のひらの感覚を呼び戻し、五感を刺

激するという点では素手で用土に触れる事には大きな意味がある。土に入れる種子も数種類の大きさのものを用意して、指先で摘んで指先の感覚を呼び覚ます配慮を行った。指先の器用さに応じた播種の方法については、個人ごとにさまざまな工夫とアドバイスが重要である事を確認した。

作業は、プランターの真ん中にテープで分けをして、2人での共同作業とし、ペアとなった人との会話が弾んで大変和やかな雰囲気での作業となった。車椅子の利用者は、少し高い位置での作業となるため、それに合ったテーブルを利用した。その結果、足や腕、指先のリハビリテーションとして有効な活動であることが実証されたのである。手が不自由なために、何ごとも手を出さなくなってしまう人には、作業の仕方や道具の使い方を工夫して何とかやりとげる意欲を出してもらうことが目標になった。

また、園芸の指導を行ったのは、農学部で園芸学を学ぶ学生有志が担当した。しかしながら、園芸療法の目的をよく理解しないまま参加した学生はどのように対応して良いかわからず、思わず親切心から手を出してしまう。その結果、時間内に綺麗に仕上がるが、施設利用者が「自分で出来た。」という実感を持たずに終わってしまい、自発的なリハビリテーションにはならないことがわかった。作業の目的によっては、介助者はじっと我慢して作業を見守る必要がある。シャベルを床に落としても、指導者とアイコンタクトを取って、助けてあげたらよいかどうかジャッジしなければならない。リハビリテーションで大切なことは、意欲を維持することであり、これが非常に難しいことを実感した。

これらの事例から、園芸療法が障がい者と健常者の相互理解に大きな役割を果たすことは明確である。また、養護学校の現場におい

ても、園芸療法は大きな反響を呼んでいる。私はさらに、農業を通して生命の大切さを伝えるために養護学校の子供たちを畑に招待して農業体験に参加してもらい、地球環境を守る精神や人材を育てるプロジェクトを提案、実践することにした。

都市部に住んでいる障がい者たちは、日常生活の中では自然や植物と触れ合う機会が少なく、健常者と一緒に屋外でスポーツなどが出来ない子供の多くは、自分の殻に閉じこもりがちである。園芸は、そんな体力面・精神面での心のバリアを取り除く役割を果たすのだ。自然や植物との関わりは、子供たちにとって豊かな自然体験や環境教育という意味で子供たちの豊かな好奇心を引き出してくれる。幼少期の豊かな実体験は、成人してからの植物や環境保全への意識や関心に大きな影響を与えるのである。その証拠に、土いじりをしている子供たちの目は、キラキラと輝いている。子供達はこの活動を通して、自分が一人で生きているのではなく、周囲の多くの存在によって生かされていることを知る。植物との新鮮な出会いや触れ合いを通じて、子供たちは、虫や植物と出会い、生命の偉大さに出会うのだ。

また、畑には養護学校の子供たちだけでなく、近くに住む高齢者や主婦達も訪れる。先日は、畑の近くを通りかかった女性から、「ここで白菜を作りたいんです。」と頼まれたことがある。話を聞いてみると、その女性は韓国人で、息子は聾学校の生徒であった。女性は目を輝かせながら、息子と一緒に栽培した白菜でキムチを漬けるのが夢なのだと話してくれた。私は喜んで協力をお受けすることにした。豊かな自然や植物と触れ合いながら仲間たちと交わり、ゆったりとした時間を過ごすことは、日常生活の息抜きにもなる。母親は農作業に従事する息子の姿を見て、何度も涙を流していたのが印

象的であった。

私はこれまでの事例や経験から、園芸療法を通して障がい者側の積極的なアプローチを多く目にすることが出来た。健常者が相互理解のために歩み寄ることも大切だが、それ以上に障がい者側から積極的に健常者との相互理解への歩み寄りを行っていくことは、大変難しく、とても大切なことである。互いの心が歩み寄ることで、真の相互理解が生まれるのであり、私は園芸が両者をつなげる介添え役を担うものだと確信している。私は園芸福祉を学ぶ者として、現場での知識と実践力を身につけ、豊かな心の輪を広げるために多様な分野で活用していきたい。

■ 佳作

想いを声に、カタチに

小松崎有美

「筋ジストロフィー？治らないやつでしょ。」

初対面の方に兄のことを話すと決まってこう質問される。

「まあ指定難病だけど。」

そう答えたあとに返ってくる反応も「あまり生きられないやつだよね。」というもの。何だか少し歯がゆくて。それに対し私はどうしても補足や訂正を試みたくなくなってしまふ。

「まあ、そう言われるけど、今は進行を遅らせる薬の開発も進められていて。運動療法とか手術療法とかもあるから。」

いつもの質問にいつもの返答。少し前までは筋ジストロフィーが二十歳までに亡くなる病気と言われてきたが人工呼吸器の導入でずいぶん長生きができるようになった。ITの発展した現代ではパソコンを使って仕事や社会参加をしている人も多い。実際兄もそのひとり。音楽が好きな兄はパソコンで曲作りをし、インターネットで知り合った仲間とオンライン演奏会を開く。

「だから何もできないわけじゃなくて……。」

そこまで言いかけてやめた。実は最近、兄の調子が良くない。何せ今年だけで既に三回肺炎で入院している。ただでさえ嚥下機能が低い身体は風邪をこじらせやすく、肺炎となれば他の器官への影響も免れない。何より困ったのが退院後うまく言葉が出なくなったこと。

「あ……い……あ……お……お」

私が寝返りを補助すると兄が苦しそうに声を出す。

「えっ。兄ちゃん、何？」

「あ…い……あ…お…お」

「えっ。ちょっとわからない。もう一回言って」

そんなことが度々くり返される。やがて兄は話すことが苦痛になり、聞き返されることはもっと苦痛になった。テレビもトイレも全部指さし。そこに言葉はない。苦肉の策で音の出る『あいうえおボード』を持たせると『し・に・た・い』と打ち込んだ。そのくらい声を奪われることは、兄にとって辛いことだった。歌うことが好きなら、尚更。

そんな兄を救おうとあらゆる相談機関を介し、言語聴覚士の方が主催する『オンライン構音障害リハビリ』に参加することが決まった。その当日。画面には約十名の参加者が映し出された。失語症、パーキンソン病、筋ジストロフィー、中にはバイリンガルの子どもまで。皆が皆、自分の想いを「声」に乗せて伝えたがっていた。リハビリは突起で仕切られている会話補助装置を使って行われた。とにかく話す機会をコンスタントに設けることが大切と先生は言う。しかしレッスンを終え、一人の参加者が「日中は家でひとりになってしまうので話す機会がない。」と吐露。そこで兄の提案で『オンラインリハサークル』を発足させることになった。

「そ・れ・れ・は・は・り・れ・ま・す」

(それでははじめます)

全体に向かってゆっくりアナウンスをする。久々に兄の声が部屋に響き渡った。最初はあごや顔全体を動かす体操をし、段階的に「おーい」「おはよう」といった短い言葉の練習をする。そして最後「もし話せるようになったら。」というテーマで話す時だ。

「カラオケに行きたい」

「ともだちを作りたい」

「他の言語にチャレンジしたい」

各々がゆっくり、しかし力強く答える。

そして兄も。

「私はこの先ますます動けない身体になります。病気の進行は止められず、人の手を借りなければ呼吸すらできません。だけどその時に自分の口で『ありがとう』と言いたいのです。ただそれだけでいいんです。」

画面の向こうから溢れんばかりの拍手が起こった。確かに筋ジストロフィーは『治らない』病気かもしれない。病気の進行と共にできないことが増えるのも事実。だけどもしそうだとしてもチャレンジしちゃいけない理由はない。かつて兄が「足が動かないなら手がある。手が動かないなら口がある。口がダメなら心がある」と言ったように、気持ちひとつで未来は変えられる。ならば私たちにできることはただ一つ。その想いに寄り添っていくこと。

あれから兄は声を出すようになった。二語文から三語文へ。一語ずつ、一歩ずつ。そんな兄を見ながら私も「頑張らなきゃ」と思える。夜間の痰吸引。人工呼吸器の装着。とにかく忙しい日常に、今は兄の強さや優しさが支えとなる。

今ならあの時の「あ…い……あ…お…お」の意味がわかる気がする。

あれは、きっと、『ありがとう』だ。

■ 佳作

うそから出た誠

東のぶこ

この十一月三日文化の日に我々はライブをするために中野区のあるデイケアセンターを訪問した。バスのお迎えを頂き施設の玄関に着いたら担当者 Nさんと一緒に丁寧に迎え入れてくれた八十代と思しき白髪の男性 A氏がかいがいしく我々七人にスリッパを出してくれた。

この年はコロナ感染蔓延で悩みだけが増幅するような日々だったが、思い切ってライブのオファーを受け入れて足を運んだわけだ。活動の核はピアノ伴奏でシャンソン、カンツォーネ、ジャズを歌い、元気をお届けすること。このボランティアグループを主宰して今年で十六年目になる。

家族の事情、ご本人の体調等をおもんばかってこちらから出前出張コンサートを提供しようと始めたボランティアである。コロナ前までは東京都内の高齢者福祉施設、公的機関、交流施設などにも伺っていた。

亡き母が音楽の教師をしていて「歌は人を幸せにする」をおまじないのようにピアノを弾きながら歌っていた。娘の私も同感だった。しかもデイケアという日常のルーティンワークに非日常のイベントは楽しいものだ。

あまり反応のない方もいれば踊り出すような元気印の方もいる。今回も計十二曲、ほぼ一時間程度のミニライブだったが出演者の我々も久しぶりだったので気持ちは高揚していた。ドレスまで吟味

して臨んだ。

検温、消毒と手際よくナビゲートしてくれるくだんの紳士 A 氏が軽やかに働いている。

あの方はもしかして施設長？だと確信してしまった。この業界は離職率も高く、数か月ぶりに伺うと必ず新人さんがいる。その景色を眼にするとすぐニューフェースと思い込んでしまう。

リハーサルも済み会場に向かうと、他のスタッフと間隔を考え、座席設営をしている A 氏がいた。デイケアに来る利用者が今回の聴衆である。

車いすの方も散見できる。A 氏はビニールの手袋をして優しく声をかけて利用者さんを誘導している。まめまめしく、かつ真剣だ。

思いのほか盛り上がったライブ。思い切って開催してよかったと思わせてくれた。

A 氏は我々の控室にお茶やお菓子を持参してくれた。会釈をして部屋を後にした。

しばらくして N さんと本当の施設長が挨拶に見えた。「え～っあの男の方 (A 氏) はデイケアの利用者さんなんですよ」「-嘘！…」全員絶句した。

奥様を亡くされて一人暮らしをなさっていたのだがボヤを出し、近くに住む五十代のお嬢さんが福祉事務所に相談、要介護を貰い、デイケアに通うことを勧められたものの、自分はまだ何でも一人でできると主張、娘の心配を晒^{あざわら}う数か月の状況に、施設長がアイデアを出したのだそう。かつて商社マンとして世界中で働いてきた

方とか。それなりのプライドをお持ちだったのであろう。

娘さんがくどく「デイケアに行くのよ」と告げると異常に拒否をする。それが彼の尊厳を損なうのなら「ボランティアに行く」と思わせたらどうかしら、もちろんご本人の意思が大切だけれど…と施設長が提案した。「週三日ほどボランティアをしてみたら？と言ってみて、うそも方便よ」娘は従った。

近くに住む娘はデイケアに行く父親が無事にお迎えのバスに乗る事を確認すると大急ぎで父親の家の家事をこなし夕食と翌日の朝食を準備して合間に自分の家の家事もこなせるようになったと喜んでいられるらしい。

実はただ単にデイケアの利用者さんに過ぎないが当人は本当に「ボランティア＝仕事に行く」と信じているらしく、俄然張り切る不思議な日々になった。まだらボケの症状も霧散し眼には力がみなぎりキラッと輝いてきたとか。娘にも「明日はボランティアの日だ。結構忙しいよ。」と以前の仕事をしていた頑張りの片鱗を見せる。

「バスの送迎もありいい身分だよ。清掃、洗濯、話し相手、囲碁の相手など楽勝だよ。今日は男性の入浴介助で服を脱がせて着せてあげたんだよ」。

施設長は「へ～そんなことをさせていいのですか？」と娘に問われて「大丈夫です。危険な浴室内は若手の男子スタッフがしますが脱衣所ではお父さんは手際よくなさって喜ばれていますよ」人は誰かのために生きられることが『生きがい』『やりがい』なのかもしれない。周りのスタッフもごく普通に受け入れている施設の空気に脱帽だ。

利用者さんのお茶の時間になったようだ。誰かが「Aさんー、みんなでお茶にしますよ」「は～い、今入れま～す」

施設長曰く。「A氏は本当になくってはならない方でそろそろデイケアの利用者さんではなくて正式なボランティアさんとして受け入れたいとお嬢様には話してあるのですよ。

彼のお茶はおいしいのよ。聞き上手で仕事も丁寧、言葉も品があってファンも多いのですよ。」

次回我々が訪問する頃はさらに磨きがかかり、もっと輝いているかもしれない。

これぞ『うそから出た誠』だなと心温かくなった。

外国籍の部

■最優秀賞

コロナ禍での心理的な成長…………… 申 林

■優秀賞

イスラム教の国々の女性問題 …………… ナイム マワラ

■佳作

認知症断絶を乗り越えて…………… ZHANG MINGQIN

豊かな福祉社会を創るために断絶を乗り越えて…………… イソ チ ウィン レ

■ 最優秀賞

コロナ禍での心理的な成長

申 林

新型コロナウイルスの新たな感染拡大で多くの人の生活リズムを乱し、体も、心も大きなショックと影響を受けました。このような状況で私たちはどうすればコロナウイルス負けずにより良い生活ができるのでしょうか。体をエクササイズで強化し、十分な睡眠をとって栄養バランスを確保し、手洗い、消毒、マスクの着用、自身の免疫力を高めるなどの基本的な対策もさることながら、健康的な心理状態を保って自分の気持ちを整えて、思い方を積極的向上し粘り強く自分の心を守ることでコロナウイルスによる恐れと不安を緩和することも重要である。ではどうやってこのような強い心を育むことができるのでしょうか。

まず自分の気持ちを率直に受け入れることです。自分ではどうにもコントロールできない状況が起こった場合に感情の揺らぎ、恐れや焦慮や無力感や不安など気持ちが発生した場合に表れます。自分の気持ちを受け入れ、自分を理解すること、自分自身を思いやり寛容さを保つことが大切です。マイナス思考の泥沼にはまるのではなく、自己否定、自己攻撃をしないように工夫しなければなりません。

具体的に例を挙げて説明すると、例えば私はずっと日本で暮らしていたという願いを叶えるために、コロナウイルスが最も深刻な時でも思い切って日本に来て、ひとり暮らしをすることにしました。中国に、夫と子供もいるのですが、夫と空港別れる時、泣きながら「最初にまた会いたい。そして、そのあとは絶対離れない」と言ってく

れました。子供が母を求めている様子などを思うと私自身も夫に会いたくて子供が恋しいという気持ちが増えます。自分が日本に来ることに決めたことが本当に正しいのかどうか常に疑っており、頭の中には二人の自分が喧嘩をしているかのように正しいと正しくない二つ答えがいつも私を引っ張っています。強い孤独感も感じています。我慢できない時にアパートにひとりで泣いて何回も諦めて中国に帰ろうかとも思いました。

しかし、「せっかく来たのにむざむざと諦めて良いのだろうか、もしかしたら本当に諦めてしまったら夫や子供など応援してくれる人たちや自分のそれまでしてきたことを夫や子供など応援してくれる人たちや自分のこれまでの努力が全て無駄になってしまうのではないのでしょうか。今はただ一時的に離れているだけで、よりよい再会ができるのではないでしょか」と自分に言い聞かせています。

そう思うと、気持ちを切り替えて充実した毎日を送らなければなりません。よって、自分のスケジュールを立て直すことにしました。毎日エクササイズしたり勉強に集中したり暇や寂しくなる時、自分を理解し、無理せずに音楽を聞いたり美味しい物を作って食べたり、リラックスゲームをしたりして紛らわしながら自分の気持ちを整えます。

次は落ち着いて自分で考えて自分の目標を明確にすることです。私は自分を疑って自分に異議を唱えてとても辛くて迷っていた時に自分に「日本に来る原動力はなんですか。自分が望ましい生活はどのような生活ですか。」と問いかけます。落ち着いて考えると心から答えが出てきました。それによって目標も明確になりました。元気を出すことができます。目標を意識すると他の人に心添えさせられたり催促させられたりする必要がありません。自主的に行動する

ことで葛藤しないで済みます。

過去を振り返ることではなく、自分を叱ったり後悔したり泣いたりすることに多く時間をかけることがなくなりました。未来を楽しむにして常に前向きに問題を解決するように視点を置くことができます。人生は生きているうちに色々なことに会います。未知のことがおこってしまうと私たちは計画のプランを破る可能性があります。人間万事塞翁が馬。どんなことがあっても命の意義を見つけて、自分の目標を明確したら、すべての痛みが和らげます。自分の実力を高めて、将来のことに直面する能力を身につけることができます。人間にとって、生活の中にはもう大変なことがたくさんあるので、どんな状況にあっても自分を理解して受け入れて、自分を責めず、自分を困らせないで、目指している生活を叶えるために少しずつでも努力することが大切だと思います。

コロナコウイルスの間に自律と自己成長を維持して、この世界に対する不確定性に勝つ。この変化している世界を抱いて異なる時代に自分に合った生活パターンを選択してこそ生命の強者になることができます。このような自分を成し遂げたのもコロナコウイルスのおかげだろう。これは最も貴重な成長では無いだろうか。

■ 優秀賞

イスラム教の国々の女性問題

ナイム マワラ

私は中学生だったころから少しずつ女性問題に関心を持ち始め、最初はなぜ女性が差別されなければいけないのだろうとも思いました。女性は男性よりも優れているところが多いと科学的にも証明されています。専業主婦は仕事をしていないからと言って暇と思われませんが家事、育児を両立する、このことは体験してみない限りどれほど大変なことなのか理解することができません。このようにどんなに忙しくても、一部の男性ではありますがずっと家にいるから暇と思われ、子育てに一切参加せず女性にすべて任せ男性は何もしないという状態が日本でもまだあり、女性の方は苦勞しています。

母国であるパキスタンは、イスラム教を信教している方が9割おり、男性社会の国です。女性の差別問題を子供のころから見てきて来ました。先ほど書いたように家事、育児をすべて女性に任せ、子育てを簡単だと思っている男性は、パキスタン国内では半分以上います。上記に書いたことを高校2年生のころには解決または改善して女性が生きやすいようにしたいと思うようになりました。

パキスタンは日本でもあまり知られていない国でもあります。MEMORVAによると日本でのジェンダーギャップ指数は0,650で116位、パキスタンは0,564で145位になります。こちらは世界146カ国から順位付けされたもので、見ての通りパキスタンは最後から二番目になります。このようにパキスタンは男女平等とは程遠い状態です。

パキスタンはイスラム教を信教している方が多く、女性を守るために男女間の関係はとても厳しいです。そのため女性は男性とあまり話したがらず、男性は話せない代わりに遠くから女性をいやな目付きで見たりし女性がとても不快な気持ちになります。私自身もこのような体験をしたことがあり、男性が多くいるところでは、男性方の目つきが怖く前を向いて歩くことができません。それ以外にも貧しい地域の男性方は男女間の関係がさらに厳しく、女性との距離をしっかりと守る男性もいますが、半分の男性は何とかして女性に触れたいと思い痴漢などの行為をしたり、さらにひどい方では小学生の女の子も含む女性を誘拐し強制的にわいせつな行為をし、被害者は長期間のトラウマになったり、パキスタンでは結婚まで女性は処女でなければいけなく、強制的に性行為を経験したら、処女ではなくなるためその後の結婚のチャンスも失い、家族も社会から恥を受けることになり、大変大きい影響を与えます。

児童婚・児童出産という問題もあります。平均的には20代のうちに女性は結婚しなければいけないという暗黙のルールがありますが、貧しい地域や一部の家族の伝統で10代のうちに結婚をしその後、若くして妊娠・出産を経験します。同意の上の結婚でしたらいいのですが、女性の意見を聞かずに早くお金のかかる娘を嫁がせて楽な人生を送りたいと思う親も少なくありません。その後幸せな結婚生活を送る人もいますが、DVにあってしまう女性もいます。男性社会のため女性の意見は尊重されず、離婚ができないままDVを受け続ける生活を送る女性もいますし、DVから抜け出すために離婚する女性はとても少ないですがいます。親に相談しても女性が悪い男性は何も悪くないと言われ女性側は頼れる人がいなくなってしまう。このような普通の生活でも女性の意見が尊重されていま

せんので、女性ならではの生理という話題になると、女性自身が隠すようになります。生理の存在を知らない男性も多くいます。隠すということになるため、学校でも生理についての教育が行われず、そのため半分の女性は生理が来るまで生理について知らず、生理が来た際にショックになってしまう方も多くいます。母親も自身が聞いたまたは経験したことを子供に教えるため、間違った知識を得てしまう可能性もあります。

こちらではパキスタンの女性問題を書かせていただきましたが、イスラム教を信教している国々でも同じような女性問題が存在します。女性問題は、ときには男性が原因の時もありますし、ときには女性自身の考えや伝統が原因になってしまうこともあります。そのため女性問題はゆっくりと少しずつ、女性がどう扱われるべきかを訴え続ける必要があります。

■ 佳作

認知症断絶を乗り越えて

ZHANG MINGQIN

先月専門学校二年生最後の実習が無事に終わりました。今まで特別養護老人ホームや老人ホームを訪れたことがなかったので、行く前は不安な気持ちでいっぱいでした。自分の言葉はちゃんと伝わるだろうか、尊敬語や丁寧語で頭がぐちゃぐちゃになりました。初めのうち、何を話題にすればいいか全然分からなくて、ただうなずくことしかできなかったので、気まずく感じました。でも実際に利用者さんに接してコミュニケーションをとって多くの事を学びました。健康に元気に過ごしながら暮らしていけるように作った施設と思いました。

1、認知症のイメージが変わった。

レクリエーションの風船バレーボール参加して利用者さんのテンションが上がって、いろいろな話ができました。その会話を通じて多くの方の人生、生活に触れることができました。例えば日韓のハーフのある利用者さんは、日本で生まれ育ち、ハングルも話せる方でした。刺繍が得意でミシンの技術で家族支えたと伺い、凄いと思いました。私は韓国料理が好きなので、聞いたら、手軽に簡単美味しいできるビビンバともやしとほうれん草の和え物を教えてくれました。「私の人生はまあまあ今死んでも後悔あまりないな、笑って向き合いますよ」「外国語は難しいですけど中途半端なのはダメよ、日本語大事にして、積み重ねて続けていくと、将来いいことがあるよ。諦めないでね」「いい年なので、家族のためだけじゃなくて自

分の幸せを掴んで親を安心させるべきだ。まだまだがんばれるよ」と温かい言葉で励まされました。実はこの方は認知症があったのですが、他の人との会話を聞いても普通にやり取りしていたので、認知症だとは全然気づきませんでした。認知症は簡単には判断できない難しい病気、恐ろしい病気だとはじめて実感しました。皆さんそれぞれの人生を歩んできて、最後に認知症になったのだと言う事実を改めて実感しました。そのことに気づくと他人事ではないとつくづく思いました。でも予想以上に楽しくて、自分でもやっていけるという自信を持つことができました。

2、尊厳を守るという事も前以上によく理解できました。

歳をとっても病気になってもその人の尊厳を奪ってはならないと、施設でいろいろな場面を見学できました。その代表的なものとして。排泄介助です。利用者さんが自力でトイレに行って排泄するのが難しくても、ポータブルトイレを使えば、オムツに頼らずに済み QOL が向上することを学びました。ポータブルトイレは小さなことのようにですが利用者さんの気持ちは大きく違うので、本人の気持ちを良く聞いて対応するのが良いと思いました。自分が介助を受ける立場なら、どうだろうと考えました。利用者さんの尊厳を守ることを意識して、適切な排泄介護をしなければなりません。時々ハプニングが起きたとき、職員さんは落ち着いて明るく優しい言葉をかけていました。利用者さんの精神的な負担を和らげるようにしていたことが印象に残りました。職員さんの「大丈夫、すぐにきれいにしますから。」「服が汚れているので、着替えましょうね。」の言葉に、日本語独特の細やかさや優しさを感じました。

3、ボディメカニクスの重要さを痛感しました。

介護の仕事は基本的に肉体労働が多いです。自分で生活することができなくなってしまった高齢者の方々のお世話ですから。食事の介助、排泄の介助、オムツ交換、お風呂の介助など、すべて自分の体を使い、相手の体に直接触れてサービスを提供します。技術がない状態で行えば逆に自分の体に負担がかかって、大変なことになります。そして、うまくできないことでストレスも感じます。今まで学校で習っていましたがボディメカニクスの重要さを痛感しました。自分の身体を守ると同時に利用者さんの安心、安楽、安全に繋がるということを現場で見てよく分かったので。今後、学校でもっときちんと学び、練習しようと思いました。

今回、利用者様に協力していただいてさまざまなことを見学させていただいたこと、とても感謝しています。食事、入浴、排泄介助などのイメージがつかめました。今コロナ感染拡大時期に認知症が進行した利用者さんが多かったので、マスクをつける意味が分からなくて外してしまい、コロナに感染するリスクが非常にありましたが、職員さんたちがきちんとサポートする姿を見て、こんな介護技術を身につけたプロの職員になりたい、このような施設で働けるようにがんばって勉強していきたいと思いました。

実は実習に行く前、きつい、臭い。介護の仕事は給料も他の仕事に比べ低い、そう思っていました。その一部は事実かもしれないけれど、それを上回る魅力がある仕事だと、今は思っています。いろんな分野の役割活躍して「認知症勉強したら認知症ケア携わってとかリーダーシップを勉強するとか。」すごく将来性あるの仕事。介護の仕事給料安いからもっとあげよう政府からの発言最近のテレビ番組時々見かける、下手の会社入るよりは介護の仕事全然安全安定

の収入を得られるので、コロナ禍で転職の方が多いいも事実です。

間もなく来年受験生なので、模擬試験やバイト、実習記録に追われて、遊ぶこともほとんど無い日々になりそうです。私は介護福祉士を目指すして、計画をきちんと立てて、初心を忘れず、すこし辛いことあってもがんばって目の前の困難を乗り越えて、友達とお互い励ましあって、夢を持って進んでいきたいと思います。

■ 佳作

豊かな福祉社会を創るために 断絶を乗り越えて

イソ チ ウィン レ

「断絶」とは「分かれる」という意味である。一人一人の考え方の違いで意見がバラバラになってしまったということである。本当は一つになったほうがいい、仲良くしたほうがいいものが人々のそのものへの見方によって分かれてしまったという意味でもある。しかし、豊かな福祉社会を創るためにはその一つ一つの断絶を皆で協力し乗り越える必要がある。

例えば、昔は世界のほとんどの国では男女不平等が問題として取り挙げられていた。国によっては平等な状態に近づくため色々な手段を使って解決してきたが、一方で男女格差が埋まらない国もあり、わずかに不平等な部分が残っていた。しかし今は、日本を含め、世界中の多くの国が男女平等の社会を目指すために取り組みを進めている。国によって違いはあるが、男女の格差をなくし、ジェンダーの問題を解決することが国の発展、またはより豊かな福祉社会を創るためにも繋がると私は思っている。最も大切なのは外見ではなく中身である。性別は関係なく、その人がどのような実力を持っているのかなどを見てから判断するべきである。そして、「男性だからこれをやれる」とか「女性だから無理だ」とか一目だけ見て決め付けるのはよくないと思っている。

二つ目の例は、若者とお年寄りという世代の間の格差が大きな問題になっていることである。昔のほとんどのお年寄りたちは迷信家で何についても自分たちがもっと長く生きてきたため若者たちの意

見や考え方などをあまり聞いてくれなかったし、認めてくれなかった。一方、若者たち自分たちの間での出来事を自分たちだけで解決するという決心を持っている。それでも今は、若者が声をあげる機会が増えたことで、世代間格差の解消を真剣に議論する契機になる期待があると思っている。また、少子化、高齢化、核家族化などの現象によって、世代間でコミュニケーションを行う機会が減少しているという考え方もある。お年寄りの方々は従来の伝統的、規範的な言葉遣いをして、若者たちの新しい言葉遣いを否定したりしがちである。一方、若い人々は新鮮さや独自性を求め、伝統や規範から解放された言葉、あるいは若者言葉で自分たちの仲間内のコミュニケーションを行うことが多いのである。だから、若者は伝統や習慣の意義を再確認するとともに、社会を担ってきた高齢者に対して敬意を表し、高齢者は将来の社会の担い手である若者を信頼し、互い認め合い、言葉遣いに配慮しつつ、世代を越えて心を通じ合わせていくということができると思っている。

もう一つの例は、「本当の自分」と「嘘の自分」の差である。「本当の自分はなんだろう」と考える人々は今の自分が好きじゃないからそう考えるようになっただろう。「本当の自分をちゃんと見つけたら仕事であれ、学校であれ、私自身を、今を丸ごと愛せるんじゃないだろうか。嘘の自分を演じているから自分を愛せないんだ。」と思っていたのだろう。しかし、その考えは間違っている。本当の自分はいつもの自分である。上手くいかない自分もみつともない自分も全部本当の自分である。人は多面体であらゆる側面を持つ。輝かしい側面もあれば、目を背けたくなる側面もあって、美しいものも汚いものも全て自分のそのものである。自分自身から逃げてはいけない。嫌いな自分も認めて連れて歩かなければならない。弱いも

のもだらしのないのも自分なので、自分自身を愛する必要がある。そうすれば、いつか誇れる自分になれるだろう。

最後の例えは、心に自由と社会のルールに関することである。人は本来心に翼を持っていて、自由に飛び回りたいのである。けれど、社会という枠組みはそれを許してはくれない。たくさんのルールや常識といった鎖がある。ルールとはいったいなんだろう。社会とは特に明確な目標のない多種多様な考えの人の集まりだからある程度皆でこうしよう、こうしてはいけないといったルールがないと全くまとまらないものになってしまう。無法地帯でやりたい放題の危険なところになってしまう。だから、ルールというものが存在するのである。ルールとは単なる拘束ではない。ルールを守ることでそれぞれ個人の安全が保たれているのである。そしてルールは誰しもが納得できるようなものでなければならない。そして、自由とは安全の中でこそ保たれるものなので、きちんと従わないといけない。それがよりいい社会へと繋がる。

上記のとおり、事々は見方によって意見がバラバラになり、理解し合えないことがたくさんある。それでも、お互いの意見を尊重し、断絶を乗り越えなければならない。その行いが私たちの世界でより豊かな福祉社会を創るために繋がっているのである。

あ と が き

2022年の今年の漢字は「戦」となりました。

「戦」というと、どうしてもウクライナにロシアが仕掛けた戦争をまず思ってしまう。また、ミャンマーでも軍部によって国民の自由が奪われたというニュースも世界を駆け巡りました。そのような話はあちこちで聞かれます。

偶然ですが、今年の漢字が決まった時と時期を同じくして（実際にはそれより早い時期に）弊財団の懸賞エッセイの副テーマに「断絶」という言葉を使っていました。何となく同じような方向の言葉に聞こえます。本財団が夏の時点で時代を読んでいたのではないか、さもありません、の思いが湧いてきてしまいます。

とは申しても「戦」イコール悪とは言えず、野球やサッカーなどのスポーツでずいぶん盛り上がった年でもありましたね。

今回の応募作品の中で「断絶」として取り上げられた内容をみると代表的なものは次のようになります。

障がい者と非障がい者、戦争、差別、大人と子供、いじめ、感染症、生と死、マスク、普通養子縁組と特別養子縁組、貧富（経済力）の差、など。

それに対して、その断絶をどのように乗り越えるのか、について多く取り上げられていたのが次の通り。

支えあう、支える、受け入れる、気持ちを汲む、相手の立場になる、許しあう、理解する、よく知る、助け合う、何もできない、そのほか。

断絶の特徴である「困ってしまう状況」と、それを乗り越えるための「相手の立場になる」アクションはどのように生れてくるのでしょうか。本冊子から読み取っていただければ幸いです。

作品内で、受賞したかどうかに関わらず、心に残る言葉をご紹介します。

- ・ 世界は競争ではなく協働で利益を上げるシステムを考えるべき
- ・ 障がいのある足で歩行していた時、それを怪訝な目で見ると子供にお母さんが「お兄さん頑張っているのよ」と語り、娘さんが「そうだね」と言い、別れる際にあいさつを交わした。
- ・ すべての人が心の壁のない温かい社会
- ・ 「報いを期待することなく奉仕し自分の周りに喜びと光をまくことのできる生徒にしてください」私はこの祈りを体現できる女性になりたい。
- ・ チームの中では気持ちも似たような感じになります。一人のイライラが雰囲気陰険なものにしたり、一人の元気がみんなの気持ちを前向きにするなどです。だから私が目指すのは元気で明るい介護福祉士です。(要旨のみ)
- ・ 笑顔は周りを明るくさせる救世主だと思います。
- ・ 不安は嫌というほどの中する
- ・ (マスクで表情が分かりにくいので) 目も笑うように心がけました。(要旨のみ)
- ・ 人をいつまでも恨むと自分が縛られる
- ・ 苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む

どうぞ、この作品群をお読みいただきたいと思います。

ちょっと気が付いた事ですが、学生の部の応募では断絶に関する直接的表現が少ない感じがありました。学校での、いわゆる作文では、作品の出来はともかく、タイトルの深掘りが不完全という傾向にどうしても なりがちでした。しかし若い人からの応募は未来につながるものとして感謝申し上げたいと存じます。

アリス日本語学校横浜校
校長 八尾 勝

第24回

愛恵エッセイ募集

豊かな福祉社会を創るために ——断絶を乗り越えて——

応募方法

応募締切 2022年11月11日(金)必着

対象

1. 学生の部 在学中の方ならどなたでも。
2. 専門職の部 福祉関係の仕事に従事している方。
3. 一般の部 どなたでも。
4. 外国籍の部 日本で就学、就労中の方(但し、日本語に限りませぬ)

字数 1,600~2,000字

体裁

東京YMCAホームページよりダウンロードした応募用紙をご使用ください。手書きの場合、400字詰めA4横書き原稿用紙5枚。

応募方法

原則、応募先メールアドレス宛に電子メールに作品を添付し送信してください。メール添付が困難な場合、本チラシ裏面の応募用紙と作品を応募先住所までご郵送ください。

注意

- 応募は一人1作品まで、自作未受賞の作品に限ります。
- 応募作品の返却はしません。
- お預かりした個人情報とは本目録以外には使用しません。
- 受賞作品の著作権は主催者に属するものとします。
- 応募後のペンネームの使用の有無と内容、ならびに作品の修正はできません。
- 応募規定を満たしていない場合、作品として受理されません。

賞

最優秀賞……各部1点 賞状と副賞(5万円)

優秀賞……各部3点 賞状と副賞(2万円)

佳作……若干名 賞状と副賞(1万円)

※受賞者は愛恵福祉支援財団のホームページにて発表します。(1月下旬予定)

※受賞者の作品は「2022年度エッセイ集」に掲載されます。(事務局にて表記上の修正をする場合があります。)

※後日、表彰式を予定しています。表彰式については、応募された方に別途ご案内いたします。

主催:公益財団法人 愛恵福祉支援財団

共催:公益財団法人 東京YMCA

問合せ・応募送付先


東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」

〒169-0051 新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

E-Mail: kaiin@tokyoymca.org

TEL:03-6278-9071 FAX:03-6278-9072

<https://bit.ly/3AwcpEV> 



“豊かな福祉社会を創るために”

—断絶を乗り越えて—

— 2022 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 —

2023 年 3 月 5 日 第 1 刷 発行

主 催 公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共 催 公益財団法人 東京 YMCA
発 行 者 公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒 114-0015 東京都北区中里 2 - 6 - 1
TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712
印 刷 アーク印刷株式会社
〒 114-0024 東京都北区西ヶ原 3 - 66 - 9
TEL 03-3915-4240 FAX 03-3915-4212

非 売 品

